

横浜トリエンナーレ 2008

YOKOHAMA TRIENNALE

TIME CREVASSE

2008 9/13 - 11/30

[WWW.YOKOHAMATRIENNALE.JP](http://WWW.YOKOHAMATRIENNALE.JP)



世界各地から約70人の作家が参加し、日本最大級の規模で開催される現代アートの国際展。第3回展を迎える今回は、全体テーマ“TIME CREVASSE”(タイムクレヴァス)のもと、横浜へ来て、同じ時間を共有しなければ体験することができないパフォーマンス的な要素を多く盛り込んだ構成を試みます。メイン3会場での展示に加え、三溪園や大さん橋国際客船ターミナル、ランドマークプラザにも作品を展示し、臨海都心部一帯での盛り上げを図ります。

会期中は、パフォーマンスやコンサート、シンポジウムをはじめ、作家と参加者との対話が広がるようなワークショップやギャラリー・トークなどの関連プログラムも積極的に展開していきます。

1. 会期  
2008年9月13日(土) ～ 11月30日(日)  
開場時間: 午前10時から午後6時(入場は午後5時まで)
2. 会場  
新港ピア、日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK)、横浜赤レンガ倉庫1号館  
三溪園、大さん橋国際客船ターミナル、ランドマークプラザ、運河パーク、横浜中華街 ほか
3. 主催  
国際交流基金、横浜市、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会
4. 後援  
外務省、文化庁、神奈川県、神奈川新聞社
5. 助成<sup>※</sup>  
財団法人野村国際文化財団、Institut für Auslandsbeziehungen e.V.、  
グレイトブリテン・ササカワ財団
6. 特別協賛<sup>※</sup>  
大和ハウス工業株式会社
7. 協賛<sup>※</sup>  
ブルームバーグ、森ビル株式会社、株式会社資生堂、大日本印刷株式会社、  
キリンホールディングス株式会社、株式会社イトーキ、相模鉄道株式会社、  
株式会社アイネット、コスモ石油株式会社、東急グループ、  
東京ビジネスサービス株式会社、日本郵船株式会社、  
パシフィックホールディングス株式会社、株式会社ワコール、ほか
8. 協力<sup>※</sup>  
株式会社INAX、株式会社インターナショナルクリエイティブ、日本航空、  
株式会社ビームス、松下電器産業株式会社
9. 公式ホームページ  
www.yokohamatriennale.jp
10. お問い合わせ  
ハローダイヤル  
03-5777-8600 又は 050-5541-8600 (日本語・8:00～22:00)  
03-5405-8686 (English・9:00～18:00)  
  
Eメール: info@yokohamatriennale.jp

※ 2008年6月25日現在

## 会場紹介



### 《交通案内》

○みなとみらい線「馬車道駅」(6番出口)より、新港ピア(徒歩13分)、赤レンガ倉庫(徒歩6分)、日本郵船海岸通倉庫(徒歩3分)

○JR・市営地下鉄「桜木町駅」より赤レンガ倉庫(汽車道経由で徒歩15分)

\*会期中は、メイン3会場巡回無料シャトルバスを運行

## 〈メイン会場〉

### ① 新港ピア

横浜港でもっとも長い歴史を刻む新港ふ頭に現在建設中の建物(本年8月竣工、延床面積約4,300㎡)が、今回のトリエンナーレのメイン会場です。間口33m、奥行き132m、最大天井高約12mの柱のない大空間は、トップライトやハイサイドライトによる上方採光を通し、明るく均質な空間が志向されています。建物の柿落としともなる横浜トリエンナーレ2008では、約30人の作家による多様な形態の作品に対応できるよう会場を構成いたします。会場内にはカフェとミュージアム・ショップもオープン予定です。

【建築設計: 松本陽一設計事務所設計】

【会場空間構成: 西沢立衛建築設計事務所】



新港ピア

### ② 日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK)

馬車道駅から徒歩3分の日本郵船海岸通倉庫は、1952年に物流倉庫としてスタートし、日本郵船歴史資料館を経て、現在はBankART Studio NYKとして多目的に活用されています。横浜トリエンナーレ2008では、この鉄筋コンクリート3階建倉庫の1階の一部と2・3階を全てを利用して、約20作家の作品を展示します。

【会場空間構成: 日笠建築設計事務所】



日本郵船海岸通倉庫

### ③ 横浜赤レンガ倉庫1号館

明治の息吹を今に伝える赤レンガ倉庫は、2001年の第1回横浜トリエンナーレに続き、再び1号館が会場となります。3階のホールは、今回のトリエンナーレの特徴でもあるパフォーマンスの場として活用されるほか、会期中はコンサートやレクチャー・シリーズなど様々な関連プログラムも実施予定です。また1階には会期中限定のミュージアム・ショップもオープンします。

【会場空間構成: 日笠建築設計事務所】



横浜赤レンガ倉庫1号館

そのほかの会場(予定)

④ 三溪園

本牧の自然を活かした広大な敷地の中に歴史的価値の高い建造物が配置された三溪園は、横浜の観光スポットであるのみならず、かつて新進芸術家の育成と支援の場となったことでも知られます。この日本庭園の外苑に配された重要文化財指定の古建築の内部や野外を利用し、5~6人の作家が展示を行なうほか、パフォーマンスも実施予定です。



三溪園

⑤ 大さん橋国際客船ターミナル

抜群の景観で知られる大さん橋国際客船ターミナルの屋上に立つと、横浜トリエンナーレ2008の会場の大半を見渡すことができます。市民や観光客、客船の乗客らが行き交うターミナルに、アルミニウムの旅行鞆を連想させる移動式の映像ブース「H BOX(エイチ・ボックス)」を特別展示します。H BOXの設計を担った建築家のディディエ・フィウツァ・ファスティエーノは、今回のトリエンナーレの参加作家でもあり、この造形的空間に別途、大型のインスタレーション作品を展示する計画が進行中です。



大さん橋国際客船ターミナル

⑥ ランドマークプラザ

みなとみらいのシンボル「横浜ランドマークタワー」に隣接するランドマークプラザにエルムグロン&ドラッグセットの大型インスタレーション作品「Catch Me Should I Fall」(「転んだら助けて」=仮訳)が展示されます。高さ約10mのこのユニークな作品は、5階まで吹き抜けの大空間に合わせて構想された新作です。横浜トリエンナーレ2008のオープンに先立ち、8月1日より公開の予定です(10月26日まで展示)。



横浜ランドマークプラザ

⑦ 横浜中華街(予定)

2005年の横浜トリエンナーレでは、西野達郎が東屋をプレハブで囲んでホテルに変貌させる大胆な作品で話題を集めた横浜中華街。今回のトリエンナーレにおいても、横浜中華街を舞台に、ワークショップの手法を取り入れた大型インスタレーションが登場する予定です。



横浜中華街

⑧ 運河パーク

自動車道沿いに広がる運河パークには、線路をはさんで横浜トリエンナーレ2008の総合案内であるインフォメーションセンターと半球状のドームが対峙します。フラフープとワイヤーにより構成されるドームは、韓国の建築家チョ・ミンスクとジョセフ・グリマ&ストアフロント・チームによる作品。内部はレクチャーやイベントのスペースとして活用され、夜間は点灯して、幻想的空間を作り出します。



運河パーク

[ インフォメーションセンター・イエノイエ ]

横浜トリエンナーレ2008では、会場案内や会期中の関連プログラム紹介、チケット販売等を行なう「インフォメーションセンター」を運河パーク内に設置します。会期中は、トリエンナーレに関連する企画のほか、大和ハウス工業株式会社の協力により実現した「イエノイエ」プロジェクト実行委員会(<http://www.ienoie.net>)主催の展示やトークショー、ワークショップなど様々なイベントが行なわれる予定です。

【建築設計: 平田見久建築設計事務所】



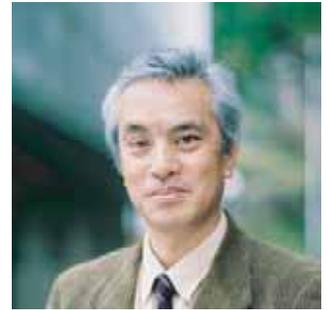
「イエノイエ」

※ そのほかの会場に関する詳細(会期、開場時間、アクセス等)は、横浜トリエンナーレ2008ホームページ又は会期中メイン会場内で配布するトリエンナーレマップをご覧ください。

## 総合ディレクター

水沢 勉

1952年横浜市生まれ。1978年慶応義塾大学大学院修士課程修了後、神奈川県立近代美術館に学芸員として勤務、現在同館企画課長。ドイツ語圏および日本の近現代美術に関心を抱き、その交流史についても論じる。主な著作に『この終わりのときにも一世紀末美術と現代』（思潮社、1989年）、『点在する中心』（共編著、春秋社、1995年）、訳書にCh. M. ネベハイ『エゴン・シーレーンスケッチから作品へ』（リプロポート、1993年）など多数。企画・担当した主な展覧会は、「第26回今日の作家」展（1990年/近藤幸夫、正木基との共同企画）、「舟越桂」展（1993年）、「アジアのモダニズム」展（1995年 / 建畠哲、塩田純一との共同企画）、「アントニー・ゴームリー」展（1996年）、「若林奮」展（1997年）、「モボ・モガ 1910-1935」展（1998年 / ジャッキー・メンジーズ、ジョン・クラークらとの共同企画）、「小杉武久」展（2002年）など多数。また、1993年と1997年にバングラデシュ・アジア・アート・ビエンナーレ、2004年にサンパウロ・ビエンナーレの日本コミッショナーを務める。



(photo: 黒川 未来夫)

## コンセプト

アートがわたしたちにあたえてくれる無限のエネルギーを、横浜で開かれる大規模な国際展でもう一度確認したいと思います。アートは、わたしたちの日常をゆさぶり、普段は気づかない、あるいは、しばしば忘れていたふりをしている「深淵」を垣間見させ、わたしたちをときに慄然とさせ、ときに勇気づけ、ときに慰め、ときに生きる覚悟をあたえてくれます。

アートの豊かさは、「新しさ」によって保証されているのではないこと。紀元前に遡るギリシャ古典古代のテキストがついに隣人によって書かれたような身近さを感じさせ、遠い異国の何世紀を経た楽曲の響きが生まれたばかりの新鮮さで耳に届き、自分が属する文化圏とはほとんど無縁の宗教空間の美的な達成に圧倒されるときに、わたしたちは繰り返しそのことを実感しています。

「新 / 旧」というパラダイムは、単線的な時間という、硬直した世界観によって保証されているのではないのでしょうか。いま世界は、高度な情報化によって、時間も空間もひとつの基準によって標準化されているように思われますが、じつはその標準化そのもののためにかえって多くの分断、おそらく、人類の歴史のなかでも、そうとうに深刻な分断をわたしたちは生きることを余儀なくされているように感じられるのです。

時間は複数の系として流れている。とはいえ、そのこと自体がそのまま豊かであるわけではありません。むしろ、時間は、ときに振れ、渦巻き、ぶつかりあい、そこに予想をしない亀裂が生じ、そこに深淵が顔を覗かせます。

アートの力は、まずは、その深淵を直視し、いうならば「タイムクレヴァス」のかたわらに佇むことによって、個人と社会、国家、性差、世代差、人種、宗教といった相互の差異を、現在の自分自身が置かれている状況を含めて、徹底して感じ取ることから生まれ出てくるのではないのでしょうか。

今回の作家選定に当たっては、アーティストたちが抱く時間感覚の鮮烈さをより強調すべく、たんに作品を展示するだけではなく、そこに身体性をもたらすパフォーマンス的な要素を重視しました。トリエンナーレの時間そのものが、日常感覚に対する深淵、つまりクレヴァスであり、そこに無数の身体表現が楔として打ち込まれるのです。

「深淵」を直視すること、そして、「楔」の衝撃を感じ取ること、それが、文化的な成熟へのたいせつな一歩となってくれることを願い、横浜トリエンナーレ第三回展をわたしは「タイムクレヴァス」と命名したのです。



## キュレーター

### ダニエル・バーンバウム

フランクフルト市立美術大学学長、同学ポリティクス・ギャラリー ディレクター。『ホスピタリティ・オブ・プレゼンス』(1998年)を著す。また、ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、エドムント・フッサール、マルティン・ハイデガー等の著作の翻訳/解説者でもある。マガジン3(ストックホルム)のアソシエイト・キュレーターを務め、「アートフォーラム・インターナショナル」への寄稿・編集を行う。これまで約50の展覧会を企画し、『ヴェネチア・ビエンナーレ』(2003年)、『第一回モスクワ・ビエンナーレ』(2005年)には共同キュレーターとして参画した。また、巡回展『アンサートン・ステーツ・オブ・アメリカ』およびボンビドゥーセンター 30周年記念展『エール・ド・パリ』(2007年)をハンス・ウルリッヒ・オプリスト、グンナー・B・クヴァランとともに企画構成した。最新著書『クロノロジー』をシュテルンベルグ・プレスから出版。2009年ヴェネチア・ビエンナーレ総合キュレーターに就任。



( photo: Wolfgang Tillmans )

### フー・ファン

1970年、中国生まれ。1992年に武漢大学の中国文学学科を卒業。ビタミン・クリエイティブ・スペースの創設に参画し、2002年からアーティストック・ディレクター。広州と北京に在住。小説家、ライターとして『ショッピング・ユートピア・センス・トレーニング：理論と実践』、『スペクテーター』などの小説シリーズを出版している。最近は、架空のエッセイ集『ニュー・アーケード(サバイバル・クラブ、センセーション・フェア、クール・サンズイ)』を発表した。『スルー・ポピュラー・エクスプレッション』、『ルーズ』、『パーフェクト・ジャーニー』、『マイ・ホーム・イズ・ユア・ミュージアム』、『オブジェクト・システム：ドゥーイング・ナッシング』他の展覧会の企画構成を行う。2006年から『ドクメンタ12マガジン・プロジェクト』の編集コーディネーターに携わる。



( photo: Zhang Wei )

### 三宅 暁子

現代美術センターCCA北九州共同創設およびプログラム・ディレクター。1997年の開設以来、数多くの展覧会を企画構成するとともに、50冊を越すCCAアーティスト・ブック・シリーズならびに同時代のさまざまな分野に関連する書籍の企画・編集・出版を行う。マリナー・アブラモヴィッチ、ダニエル・ビュラン、マウリッツィオ・カテラン、タシタ・ティーン、ジミー・ダーラム、マリア・アイヒホルン、オラファー・エリアソン、ケリス・ウィン・エヴァンス、ハミッシュ・フルトン、リアム・ギリック、ファン・ヨン・ピン、スージャ・キム、フィリップ・パレノ、ピピロッチ・リスト、アンリ・サラ、杉本博司、リクリット・ティラヴァーニヤ、ローレンス・ウィナー、他多数のアーティストの展覧会を企画開催している。また、2001年から芸術・科学・人文科学・建築を横断する国際会議『ブリッジ・ザ・ギャップ?』を企画・オーガナイズ、これまで北九州、ミラノ、チェンマイ、上海で開催されている。



( photo: Melik Ohanian )

### ハンス・ウルリッヒ・オプリスト

1968年、チューリッヒ生まれ。ウィーンのミュージアム・イン・プログレス キュレーター(1993-2000)、パリ市近代美術館 キュレーター(2000-2006)を経て、2006年4月からサーペンタイン・ギャラリー 国際プロジェクト担当ディレクター、展覧会プログラム共同ディレクター。1991年以降、『ドゥ・イット、テイク・ミー、アム・ユアーズ』(サーペンタイン・ギャラリー)、『シティーズ・オン・ザ・ムーヴ』、『リップ/ライフ』『ヌイ・プランシュ』、『第1回ベルリン・ビエンナーレ』、『マニフェスタ 1』を含め、150を超える展覧会のキュレーションを行ってきた。最近『アンサートン・ステーツ・オブ・アメリカ』、『第1回モスクワ・ビエンナーレ』、『第2回広州ビエンナーレ(中国広東省)』を企画構成している。2007年、マンチェスター国際フェスティバルにおいてフィリップ・パレノと共同で『イル・テンポ・デル・ポステリーノ』を企画構成した。



( photo: Dominik Gigler )

### ベアトリス・ルフ

1960年生まれ。ウィーン、ニューヨーク、チューリッヒで学ぶ。2001年9月からクンストハレ・チューリッヒ ディレクター兼キュレーター。『テート・トリエンナーレ』(テート・ブリテン、ロンドン、2006年)キュレーター、クンストハウス・グラールス ディレクター兼キュレーター、トゥルガウ州立美術館 キュレーター(1994-1998)、リンギーエ・コレクション キュレーター(1995-)を務めた。2003年から、出版社JRP・リンギーエのアソシエイト・エディターとして活動している。ジェニー・ホルツァー、マリナー・アブラモヴィッチ、ピーター・ランド、リアム・ギリック、ピエール・ユイグ/フィリップ・パレノ:『ノー・ゴースト・ジャスト・ア・シェル』、ロドニー・グラハム、イザ・ゲンツケン、ダグ・エイケン、オリバー・ペイン&ニック・レルフ、ドミニク・ゴンザレス・フォレストル、ジョン・アームレーダー、トリシャ・ドネリー他多数のアーティストの展覧会を企画開催、あわせてエッセイ執筆、カタログ出版を行う。



( photo: Mathias Braschler, courtesy Kunsthalle Zürich, 2004.)

## 入場料金

	当日券	前売券	団体券 (20名以上)
一般	1,800円	1,600円	1,500円
大学生	1,300円	1,100円	1,000円
高校生	700円	500円	400円

○チケットは、会期中2日間有効です(連続しない日も可)。

○中学生以下は無料です。

○前売券は2008年7月1日(火)から、チケットぴあ、ファミリーマート、サークルK・サンクス(以上、Pコード688-245) ローソンチケット(Lコード31310)、セブンイレブン、JTB、横浜美術館ほか各プレイガイドで発売(9月13日以降は当日料金で発売します)。

○障がい者手帳をご持参の方とその介護者1名の方は無料です。

## [ 特別チケットパック ] 発売中! 限定5,000セット]

### 【パックの内容】

#### ① 入場チケット引換券:

ご来場当日、メイン会場の入場券カウンターにて当日入場券1枚と引き換えいたします。

#### ② ハンディ・ガイドブック引換券:

メイン会場内にて、本展ガイドブック(小冊子、A5判、160頁程度)1冊と引き換えいたします。

#### ③ オリジナル・トートバッグ: 360mm×300mm×90mm、帆布製、ブルーマークによるデザイン。

#### ④ オリジナル・ノート: 135mm×210mm、64頁、ブルーマークによるデザイン。

#### ⑤ ショップ・カフェ割引券: トリエンナーレ会場内のショップ・カフェにて500円分の割引券としてご利用いただけます。



オリジナルノートとバッグ

【販売価格】 3,000円 (消費税込)

### 【販売場所】

東京都現代美術館、東京都写真美術館、東京オペラシティ・アートギャラリー、六本木ヒルズ アート アンド デザイン ストア、森アーツセンターミュージアムショップ、表参道ヒルズ エス アンド オー、スパイラルマーケット(青山、横浜クイーンズスクエア)、横浜美術館、BankART1929 Yokohama、横浜赤レンガ倉庫1号館、水戸芸術館、ナディッフ 渋谷店(東急文化村内)・仙台店(せんだいメディアテーク内)・名古屋店(愛知芸術文化センター内)、graf media gmほか

### 【インターネット販売】

森アーツセンターミュージアムショップ: <http://www.macmuseumshop.com/>

スパイラルオンラインストア: <http://store.spiral.co.jp/>

ナディッフ・ウェブショップ: <http://nadiff.com/>

## [ サウンド・プログラム ]

会期中の主要関連プログラムとして、実験音楽／エクスペリメンタルサウンドに焦点をあてたサウンドプログラムを予定。  
オーレン・アンバーチ(1969年シドニー生まれ)を共同コーディネーターとして構成の予定です。

## [ ART COMPASS 2008 ]

横浜トリエンナーレ2008は、シドニー・ビエンナーレ、光州ビエンナーレ、上海ビエンナーレ、シンガポール・ビエンナーレと共同で「アートコンパス2008」グループを結成し、広報やツアーを中心に幅広く連携していきます。

シドニー・ビエンナーレ (オーストラリア) <http://www.biennaleofsydney.com.au/>  
会期:2008年6月18日 - 9月7日

光州ビエンナーレ (韓国) <http://www.gwangju-biennale.org/>  
会期:2008年9月5日 - 11月11日

上海ビエンナーレ (中国) <http://www.shanghai-biennale.com/>  
会期:2008年9月9日 - 11月16日

シンガポール・ビエンナーレ (シンガポール) <http://www.singaporebiennale.org/>  
会期:2008年9月11日 - 11月16日

ART  
COMPASS  
2008



アートコンパス公式ホームページ <http://www.artcompass2008.com>

(アートコンパス2008 ロゴ)

## [ ボランティアスタッフ募集 ]

横浜トリエンナーレ2008の運営を支えるボランティアスタッフとして、6月20日現在、814名の方にご登録いただきました。  
主な活動内容は会場の運営を始め、ガイドツアーなど。引き続き、ボランティアスタッフ登録を受け付けております。  
詳しくは、横浜トリエンナーレ2008ホームページをご覧ください。

<お問い合わせ>

横浜トリエンナーレ組織委員会ボランティア係 (横浜市開港150周年・創造都市事業本部創造都市推進課内)  
Tel: 045-671-3503 Fax: 045-663-9212 Eメール: [vol@yokohamatriennale.jp](mailto:vol@yokohamatriennale.jp)

## [ 今後のスケジュール ]

7/1 前売り券発売開始

8/1 エルムグリーン&ドラッグセット「Catch Me Should I Fall」完成披露 (会場:ランドマークプラザ)

9/12 内覧会+オープニングレセプション

9/13 一般公開(~11/30)

9/13-15 スペシャル・オープニング・プログラム

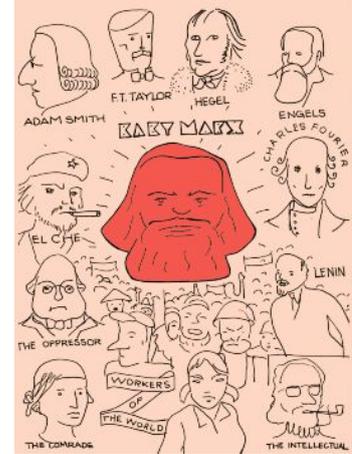
## アーティスト資料



中谷美子  
Nakaya Fujiko  
FOGGY FOREST 1992  
Childrens' Park, Showa Kinen Park  
(Structure Design: Kitagawara+ILCD)  
Tachikawa  
Photo © Ogawa Shigeo



ペーター・フィッシュリ & デヴィッド・ヴァイス  
Peter Fischli & David Weiss  
"Parts of a Film with a Rat and a Bear"  
2008 © Peter Fischli David Weiss.  
Courtesy Galerie Eva Presenhuber, Zurich;  
Matthew Marks Gallery, New York; Monika  
Sprüth Philomene Magers,  
Cologne/Munich/London.



ペドロ・レイエス  
Pedro Reyes  
Drawing for "Baby Marx" 2008



大巻伸嗣  
Ohmaki Shinji  
ECHOES - INFINITY 2005  
Pigment, felt, nonflammable cloth,  
fluorescent light, acrylic case  
photo: Ryoji Watabe  
Courtesy of Shiseido Gallery



チョウ・ミンスク と ジョセフ・グリマ  
& ストアフロント・チーム  
Cho Minsuk and Joseph Grima  
with Storefront Team  
Ring Dome (Milano) 2008



ツァオ・フェイ  
Cao Fei  
PRD Anti-Heroes 2005  
Performance, 90 min.  
Guangzhou



横浜トリエンナーレ ポスターイメージ



横浜トリエンナーレ ロゴ



<参加アーティスト>

**Marina Abramović**

マリナ・アブラモヴィッチ  
(セルビア)

**Arakawa Ei with Mukai Mari**

荒川 医と 向井 麻理 (日本)

**John M. Armleder**

ジョン・M. アームレーダー (スイス)

**Matthew Barney**

マシュー・バーニー (米国)

**Jérôme Bel**

ジェローム・ベル (フランス)

**Ulla von Brandenburg**

ウラ・フォン・ブランデンブルグ (ドイツ)

**Cao Fei**

ツァオ・フェイ/曹斐 (中国)

**Paul Chan**

ポール・チャン (中国/米国)

**Chelfitsh(Okada Toshiki)**

チェルフィツチュ (岡田 利規) (日本)

**Cho Minsuk and Joseph Grima  
with Storefront Team**

チョウ・ミンスクとジョセフ・グリマ  
& ストアフロント・チーム (韓国+米国)

**Nikhil Chopra**

ニキル・チョプラ (インド)

**Tony Conrad**

トニー・コンラッド (米国)

**Keren Cytter**

ケレン・シタール (イスラエル)

**Trisha Donnelly**

トリシャ・ドネリー (米国)

**Elmgreen & Dragset**

エルムグリーン & ドラッグセット  
(デンマーク+ノルウェー)

**Peter Fischli & David Weiss**

ペーター・フィッシュリ  
& ダヴィッド・ヴァイス (スイス)

**Didier Fiúza Faustino**

ディディエ・フィウツァ・ファスティエーノ  
(フランス)

**Luke Fowler with Tsunoda Toshiya**

ルーク・ファウラーと 角田 俊也 (英国+日本)

**Mario Garcia Torres**

マリオ・ガルシア・トレス (メキシコ)

**Douglas Gordon**

ダグラス・ゴードン (英国)

**Rodney Graham**

ロドニー・グラハム (カナダ)

Shilpa Gupta

シルパ・グプタ (インド)

Haino Keiji

灰野 敬二 (日本)

Sharon Hayes

シャロン・ヘイズ (米国)

Christian Holstad

クリスチャン・ホルスタッド (米国)

Cameron Jamie

キャメロン・ジェイミー (米国)

Kuswidananto a.k.a. Jompet

クスウィダナント・ジョンペット (インドネシア)

Joan Jonas

ジョーン・ジョナス (米国)

Miranda July

ミランダ・ジュライ (米国)

Mike Kelley

マイク・ケリー (米国)

Hassan Khan

ハッサン・カーン (エジプト)

Pichet Klunghun

ピチェ・クランチェン (タイ)

Terence Koh

テレンス・コー (中国/米国)

Kosugi Takehisa

小杉 武久 (日本)

Mark Leckey

マーク・レッキー (英国)

Tim Lee

ティム・リー (韓国/カナダ)

Renata Lucas

レナータ・ルーカス (ブラジル)

Jorge Macchi and Edgardo Rudnitzky

ホルヘ・マキと エドガルド・ルドニツキー  
(アルゼンチン)

Gustav Metzger

グスタフ・メッツガー (ドイツ/英国)

Naito Rei

内藤 礼 (日本)

Nakanishi Natsuyuki

中西 夏之 (日本)

Nakaya Fujiko

中谷 美二子 (日本)

Hermann Nitsch

ヘルマン・ニッチ (オーストリア)

Ohmaki Shinji

大巻 伸嗣 (日本)

**Ono Yoko**

オノ・ヨーコ (日本)

**Pak Sheung Chuen**

パク・シュエーン・チュエン/白雙全 (中国)

**Philippe Parreno**

フィリップ・パレノ (フランス)

**Falke Pisano**

ファルケ・ピサノ (オランダ)

**Michelangelo Pistoletto**

ミケランジェロ・ピストレット (イタリア)

**Mathias Poledna**

マティアス・ポレドナ (オーストリア)

**Stephen Prina**

スティーヴン・プリナ (米国)

**Nick Relph & Oliver Payne**

ニック・レルフ & オリヴァー・ペイン (英国)

**Pedro Reyes**

ペドロ・レイエス (メキシコ)

**Jimmy Robert**

ジミー・ロベール (ゲアドループ)

**Sasamoto Aki**

笹本 晃 (日本)

**Tino Sehgal**

ティノ・セーガル (英国/ドイツ)

**Tanaka Min**

田中 泯 (日本)

**Teshigawara Saburo**

勅使川原 三郎 (日本)

**Rirkrit Tiravanija**

リクリット・ティラヴァニヤ (タイ/米国)

**Tsui Kuang-Yu**

ツイ・クワンユ/崔廣宇 (台湾)

**Danh Vo**

ダン・フォー (ベトナム/デンマーク)

**Tris Vonna-Michell**

トリス・ヴォナ=ミッシェル (英国)

**Claude Wampler**

クロード・ワンブラー (米国)

**Cerith Wyn Evans**

ケリス・ウィン・エヴァンス (英国)

※アルファベット順、カッコ内は出身国・地域

## アーティスト資料

### Marina Abramović

マリーナ・アブラモヴィッチ

1946年セルビア（旧ユーゴスラビア）生まれ。現在、ニューヨークに在住。

ザグレブ芸術アカデミー大学院修了。60年代末より自らの身体を使い危険で忍耐の必要なパフォーマンスを行う。76年から88年にかけてドイツ人アーティスト、ウーライと出会い世界各地で人の関係性を問うコラボレーションを展開。その後ソロ活動に戻り、身体を基盤に個人史と社会に言及したパフォーマンスやビデオ作品、インスタレーションを発表し国際的に高い評価を受ける。76年 ヴェネチア・ビエンナーレ（97年も、金獅子賞を受賞）、77年 ドクメンタ6（82年、92年も）に、04年 ホイットニー・バイアニュアルに参加。世界各地の美術館での個展、グループ展多数開催、05年にはニューヨークのグッゲンハイム美術館で個展「セブン・イーザー・ピース」開催。日本では2000年 越後妻有アートトリエンナーレ、01年横浜トリエンナーレに参加、03年 熊本市現代美術館で個展「ザ・スター」開催。

### Arakawa Ei with Mukai Mari

荒川 医 と 向井 麻理

荒川 医：1977年日本生まれ。現在、ニューヨークに在住。

スクール・オブ・ヴィジュアル・アーツを卒業後、ホイットニー・インディペンデント・スタディ・プログラムに参加。荒川は、崩壊寸前の無秩序なカオスを文化的に検証するグループパフォーマンスを行う。パフォーマーたちは、建築資材を展示し、振付け、ビデオ、印刷装置を用いて構成する。パフォーマー間における文化の相違の不安定な相互関係を描き出す。05年 パフォーマ5（ニューヨーク、07年も）、06年 越後妻有アートトリエンナーレなどに参加。04年 グリーン・ナフタリ・ギャラリー（ニューヨーク）、コロンビア大学（ニューヨーク）、05年 P.S.1（ニューヨーク）、06年 ガレリー・ギゼラ・カピテン（ケルン）、07年 サットン・レーン・ギャラリー（パリ）、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（ロンドン）などにてパフォーマンス。

### John M. Armleder

ジョン・M. アームレーダー

1948年ジュネーヴ生まれ。現在、ジュネーヴとニューヨークに在住。

ジュネーヴ美術学校に学ぶ。パフォーマンス、彫刻、絵画、評論、キュレーションなど、広範囲にわたる制作活動を一貫して創造的リスクを厭わない姿勢で行っている。異なる芸術的なジャンルと物とのヒエラルキーを捨てることを実証している。1960～70年代、フルクサスと深いかわりを持ち、その影響を受けた。1969年、パトリック・ルッチーニ、クロード・ライクナーとともに、「グループ・エカール」をジュネーヴに創設する。このグループによる出版、パフォーマンス、展覧会などの活動は、70～80年代のヨーロッパに新しい美術を紹介する重要な役目を担っていた。86年 ヴェネチア・ビエンナーレ スイス代表、03年 リヨン・ビエンナーレ、06年 シンガポール・ビエンナーレに参加。06年 フィラデルフィアICA、07年 テート・リバプールで個展開催。日本では、06年 東京オペラシティ・アートギャラリー「アートと話す／アートを話す」に出品。

### Matthew Barney

マシュー・バーニー

1967年サンフランシスコ生まれ。現在、ニューヨークに在住。

イエール大学で医学を学んだ後、美術と体育を学んだ。様々な特殊メイクを施して、あらゆる二元論（神話-SF、人間-動物、実在-架空）の中間領域に、自らの身体を作り上げ、自身によるパフォーマンス映像や彫刻で作品が構成される。92年 ドクメンタ9（カッセル）、93年 ヴェネチア・ビエンナーレ、ホイットニー・バイアニュアル（95年も）、96年 シドニー・ビエンナーレ、97年 リヨン・ビエンナーレ、99年 カーネギー・インターナショナルなどに参加。国際的に数多くの個展開催、グループ展参加。日本では、95年 世田谷美術館「デ・ジェンタリズム」に出品、05年 金沢21世紀美術館にて個展「拘束のドローイング」開催。93年 ヨーロッパ2000賞（ヴェネチア・ビエンナーレ、アベルト部門）、96年 ヒューゴ・ボス賞（グッゲンハイム美術館）、99年 ジェームス・D.フェラン芸術賞（ペリエリア・ビデオ連合、サンフランシスコ）、01年 グレン・ディンブレックス賞（アイルランド現代美術館）、07年 カイザー・リング賞（メンヒェハウス現代美術館、ゴスラー、ドイツ）を受賞。

### Jérôme Bel

ジェローム・ベル

1964年フランス南部生まれ。現在、パリおよびリオディジャネイロに在住。

フランス国立コンテンポラリーダンス・センター（アンガス）で学んだのち、1991年までフランスとイタリアで数多くの振付家による作品に出演する。94年に最初の振り付け作品を発表。2001年に発表した《ザ・ショー・マスト・ゴー・オン》は彼の代表作で、05年の同作のニューヨーク公演においてベッシー賞を受賞している。04年にはパリ・オペラ座バレエ団からの委嘱により《ヴェロニク・ドワノー》を発表して話題を呼ぶ。05年にはタイのダンサー、ピチエ・クランチェンとのコラボレーションによる、二人の身体表現と会話とで構成された作品《ピチエ・クランチェンと私》を発表した。

## Ulla von Brandenburg

ウラ・フォン・ブランデンブルグ

1974年カールスルーエ生まれ。現在、ハンブルクおよびパリに在住。

カールスルーエ造形大学を経て、1998年から2004年までハンブルク美術大学で学ぶ。いくつかのグループ展に参加したのち、01年から個展や上映会で作品を発表。映像、ドローイング、インスタレーション、パフォーマンスなどの表現形態を用いて、大学で学んだ舞台美術とファインアートの両分野を融合させた作品を発表している。テート・モダン「舞台としての世界」（2005）、英国立美術大学「アゲイン・フォー・トゥモロー」（2006）等の展覧会に参加。現在、アイルランド近代美術館で個展「Whose beginning is not, nor end cannot be」を開催中（10月13日まで）。

## Cao Fei

ツァオ・フェイ／曹斐

1978年広州生まれ。現在、北京に在住。

2001年広州美術学院装飾芸術設計系を卒業。アニメ、香港映画、ラップ、ビデオ・ゲームや中国の伝統的な京劇、演劇、舞踊に影響を受け、写真、ビデオを制作している。彼女は、アニメキャラクターのコスプレをしている若者を撮るなど、現在のポップ・カルチャーを表現に取り入れる。一方、中国の急速に変化する大都市が抱える現実の問題を、鋭く、痛快に描き出す。01年ベルリン・ビエンナーレ、02年光州ビエンナーレ、03年ヴェネチア・ビエンナーレ（07年も）、04年上海ビエンナーレ、05年モスクワ・ビエンナーレ、福岡アジア美術トリエンナーレ、広州トリエンナーレ、06年シンガポール・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレ、釜山ビエンナーレ、07年イスタンブール・ビエンナーレ、リヨン・ビエンナーレなどに参加。日本では、07年CCA北九州で個展開催、05年森美術館「フォローミー！：新しい世紀の中国現代美術」、08年森美術館「アートは心のためにある」に出品。03年最優秀若手賞（第12回中国現代美術賞展）を受賞。

## Paul Chan

ポール・チャン

1973年香港生まれ。現在、ニューヨークに在住。

シカゴ美術館付属美術大学でビデオ／デジタル・アート、バード大学大学院でフィルム／ビデオ・ニューメディアを学ぶ。チャンは、政治、宗教、セックス、日常生活に哲学的な色づけをした新しい表現の美学を融合させる。ドローイング、ビデオ、インスタレーションを制作している。また、全米トラック運転手組合やインディメディアなどの活動、自然保護などの支援団体「ヴォイス」に関与、共和党の全国党大会のピープルズ・ガイド（2004）の制作参加なども行ってきている。04年カーネギー・インターナショナル、05年広州トリエンナーレ、リヨン・ビエンナーレ、06年ホイットニー・バイアニュアル、07年イスタンブール・ビエンナーレに参加。07年「ザ・セブン・ライツ」、サーペンタイン・ギャラリー（ロンドン）；ニュー・ミュージアム（ニューヨーク）で個展開催。世界の主要な美術館でのグループ展個展多数開催。

## Chelfitsh(Okada Toshiki)

チェルフィツチュ（岡田 利規）

岡田 利規：1973年神奈川県生まれ。現在、横須賀に在住。

岡田により1997年に設立された演劇ユニット。STスポット横浜を拠点とし、所属俳優として山縣太一、松村翔子らがいる。「超リアル日本語」と称される現代の若者言葉による台詞を用い、従来の群像会話劇の概念を刷新する活動を展開している。2004年に発表した《三月の5日間》で岸田戯曲賞を受賞。岡田はまた07年に発表した小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』で大江健三郎賞を受賞するなど、活動の幅を拡げている。なお、チェルフィツチュとは、「自分本位」という意味の英語「セルフイッシュ」(selfish)を幼児語化した造語。

## Cho Minsuk and Joseph Grima with Storefront Team

チョウ・ミンスク と ジョセフ・グリマ & ストアフロント・チーム

チョウ・ミンスク：1966年ソウル生まれ。現在、ソウルに在住。  
 ジョセフ・グリマ：英国生まれ。現在、ニューヨークに在住。

チョウ・ミンスクは延世大学建築学部、コロンビア大学大学院（建築）を卒業。ニューヨーク、ロッテルダムの建築事務所で働いた後、1998年彼の最初の建築事務所「チョウ・スレッド・アーキテクチャー」をニューヨークに創設。03年には韓国に帰り、「マス・スタディーズ」を設立。世界各地の建築プロジェクトに参加し、数々の建築賞を受賞。04年ヴェネチア・ビエンナーレ建築展に参加。ジョセフ・グリマはロンドンで建築を学び、ミラノで雑誌『ドムス』の編集に携わり、07年にはニューヨークの建築と美術のためのギャラリー「ストアフロント・フォー・アート・アンド・アーキテクチャー」のディレクターとなる。両者は07年、「ストアフロント・フォー・アート・アンド・アーキテクチャー」の25周年記念に際して、共同してリング・ドームをニューヨーク・ソーホーの野外に設置した。リング・ドームは08年の4月にはミラノサローネ国際家具見本市に際して再構成され、また横浜トリエンナーレ2008でも新ヴァージョンが設置される予定。

## アーティスト資料

### Nikhil Chopra ニキル・チョプラ

1974年インド生まれ。現在、ムンバイに在住。

2001年メリーランド・カレッジ・オブ・アートを卒業後、03年オハイオ州立大学にて修士号を取得。05年ムンバイに帰国。ニキル・チョプラは一貫して故郷のインドをモチーフに、写真やビデオ、パフォーマンスなどで作品を制作している。彼の代表作は、架空のインド王族に自らが扮して撮影した作品シリーズで、一般的にすぐに思い浮かべられる植民地時代のエキゾチックなインドの王族の姿がリアルに提示される。しかしそれらは、チョプラが創作したまったく架空の物語であり、我々がいかに創られたイメージに判断を委ねているかという事実をこのシリーズを通じて知ることとなる。06年ブルックリン美術館（ニューヨーク）、07年グロブナー・ギャラリー（ロンドン）、クイーンズ・ギャラリー（ニューデリー）、アブロンズ・アート・センター（ニューヨーク）等でのグループ展に出品。05年キタブ・マハール（ムンバイ）で個展開催。

### Tony Conrad トニー・コンラッド

1940年コンコード（ニューハンプシャー州）生まれ。現在、バッファローとニューヨークに在住。

1962年ハーバード大学を卒業（数学専攻）。ミニマリズムの先駆者のひとり。ビデオ、映像、演奏、作曲といった様々な領域で前衛活動を行っている。60年代初頭、ラモンテ・ヤング他数人で、西洋音楽の型にはまらない、持続する音をプロデュースする「シスター・オブ・エターナル・ミュージック」を創立した。彼らが制作した《デイ・オブ・ナイアガラ》（65年）は、初期のミニマルの作曲家/演奏家の作品として知られている。最も有名な映画《フリッカー》（66年）は、実験映画（構造映画）ムーヴメントの初期作品の鍵とみなされている。72年ドクメンタ5（カッセル）（92年）も、06年ホイットニー・バイアニュアル、07年パフォーマ07などに参加。06年ガレリー・ダニエル・ブーフホルツ（ケルン）、オーバーデュイン & カイト（ロサンゼルス）、グリーン・ナフタリ（ニューヨーク）で個展開催。

### Keren Cytter ケレン・シタール

1977年テル・アヴィヴ生まれ。現在、ベルリンに在住。

テル・アヴィヴのアヴニ美術研究所で視覚芸術を学ぶ。イスラエルの数ヶ所のギャラリーで作品を発表した後、2002年、デ・アトリエーズの奨学金を受けアムステルダムに移る。シタールは、台詞や筋立てといった通常の形式を用いずに映画の脚本を書く作家でもある。彼女は、センテンスとイメージの非同時性の新しいモンタージュで、作品を制作する。わずかな変化を加えたイメージと音の反復を繰り返す作品は、場所、時間、シナリオの配列を崩し、言語と行動における関係への関心を導くものとなっている。06年アート・バーゼル37、07年モスクワ・ビエンナーレ、グラスゴー・フィルム・フェスティバルに参加。04年アムステルダム市立近現代美術館、05年フランクフルト・クストフェライン、チューリッヒ・クストハレ、06年ベルガモ近現代美術館、07年ウィーン現代美術館で個展開催。06年バロワー賞（アート・バーゼル37）を受賞。

### Trisha Donnelly トリシャ・ドネリー

1974年サンフランシスコ生まれ。現在、サンフランシスコに在住。

1995年UCLA卒業後、2000年にイェール大学にて修士号を取得。ドローイング、写真、テキスト、音響、ビデオ、パフォーマンス、絵画など、ドネリーの表現メディアは多岐にわたる。視覚や言語など、知覚できる事物ではなく、人間の思考やアイデアなどの時空を超えた部分に注目し制作するドネリーの作品は、観る者の想像力をさりげなく刺激する。03年ヴェネチア・ビエンナーレ、06年トリノ・トリエンナーレ、ベルリン・ビエンナーレ、ホイットニーバイアニュアル、07年リヨン・ビエンナーレに参加。07年MoMA（ニューヨーク）、テート・モダン、08年新現代美術館等のグループ展に出品している他、国内外での個展を多数開催。04年セントラル・インシュアランス・プライズ（ケルン）受賞。

### Elmgreen & Dragset エルムグリーン & ドラッグセット

エルムグリーン：1961年コペンハーゲン（デンマーク）生まれ。現在ベルリンに在住。  
ドラッグセット：1969年トロンハイム（ノルウェー）に生まれ。現在ベルリンに在住。

1995年からエルムグリーンとドラッグセットはコラボレーションを始め、インスタレーション、パフォーマンス、映像作品、環境芸術作品を発表している。彼らは室内空間や野外にある仕掛けを加えることにより、普段は隠されている意味について考えさせ、それを支える社会的な制度を顕在化させる。また美術、建築、デザイン各領域の関係についても良く言及している。98年ベルリン・ビエンナーレ、01年イスタンブール・ビエンナーレ、02年サンパウロ・ビエンナーレ、03年ヴェネチア・ビエンナーレ、06年光州ビエンナーレ、07年ミュンスター彫刻プロジェクトに参加。欧米の各美術館でグループ展、個展開催。08年ベルリンのポツダム広場にナチスによって虐殺された同性愛者の追悼碑を完成。日本では2000年越後妻有アートトリエンナーレ、03年森美術館「ハピネス」に出品。

**Peter Fischli & David Weiss**  
 ペーター・フィッシュリ  
 & ダヴィッド・ヴァイス

ペーター・フィッシュリ：1952年チューリッヒ生まれ。現在、チューリッヒに在住。  
 ダヴィッド・ヴァイス：1946年チューリッヒ生まれ。現在、チューリッヒに在住。

1979年、ふたりのコラボレーションによる作品制作を始める。わざと日常のありふれた道具やステレオタイプなイメージを用いつつ、一般的経験や科学的知識を逆手にとった作品を提示する。例えば、鑑賞の時間が制作にかかる時間と同じビデオや、レディメイドに見せかけた手作業によるオブジェといった作品が挙げられる。89年 サンパウロ・ビエンナーレ、92年 セビリア万博 スイス館、95年 ヴェネチア・ビエンナーレ スイス館、97年 ドクメンタ10 (カッセル)、光州ビエンナーレ、ミュンスター彫刻プロジェクト、98年 シドニー・ビエンナーレ、01年 横浜トリエンナーレなどに参加。日本では、98年 群馬県立近代美術館「ヨーロッパの8人」に出品。

**Didier Flúza Faustino**  
 ディディエ・フィウツァ・ファスティエーノ

1968年フランス生まれ。現在、リスボンおよびパリに在住。

1995年パリ・ヴィルマン建築大学卒業。建築家として活躍する傍ら、パフォーマンス、インスタレーション、映像作品など、美術家としても活動を展開。いずれの分野でも、身体性との関係から建築を捉え、空間を解体して再構築する作品を生み出す。2001年にバスカル・マゾワイエとともに建築事務所「ビュロ・デ・メザシテクチュール」をパリに設立。02年、「若手建築家のアルバム」賞を受賞。03年、ヴェネチア・ビエンナーレ、04年 モントリオール・ビエンナーレ、06年 サンパウロ・ビエンナーレ、07年 イスタンブール・ビエンナーレ等、数多くの国際展に参加。05年には、CCA北九州のリサーチ・プログラムの教授として1ヶ月間北九州に滞在し、新作インスタレーション《サラリーマンの夢》を発表した。

**Luke Fowler  
 with Tsunoda Toshiya**  
 ルーク・ファウラーと 角田 俊也

ルーク・ファウラー：1978年グラスゴー生まれ。現在、グラスゴーに在住。  
 角田 俊也：1964年神奈川生まれ。横須賀在住。

ルーク・ファウラーはダンカン・オブ・ジョーダンストーン美術大学（スコットランド）を卒業。著名人をモチーフに、残された映像や写真、言説等を引用して、その人物像を再構築する映像作品などを発表。2008年、実験精神豊かな映像作家へ贈られる「ジャーマン賞」の第1回大賞を受賞した。角田 俊也は東京芸術大学美術学部美術研究科修了。80年代後半より造形制作を開始。並行して小型マイクやコンタクト・マイクを用いたフィールドレコーディングにも取り組み、以降それを活動の中心に置く。特に海外での注目度は高く、サウンドアートの展覧会に出品を重ねるほか、様々なレーベルからCDがリリースされている。

**Mario Garcia Torres**  
 マリオ・ガルシア・トレス

1975年モンクローバ（メキシコ）生まれ。現在、ロサンゼルスに在住。

カリフォルニア・インスティテュート・オブ・ジ・アーツ卒業。コンセプチュアル表現をフィルム、ビデオ、写真、パフォーマンスで行う。また、印刷物にテキストを書き加えることで、意味を付加する、「プリンテッド・インターヴェンション（印刷介入）」という手法で制作する。05年 バルティック・トリエンナーレ（ロンドン）、07年 ヴェネチア・ビエンナーレ、モスクワ・ビエンナーレなどに参加。07年 テート・モダン「ラーン・トゥー・リード」などに出品。03年 ムエストラ・アート・フェア（メキシコシティ）、07年 アムステルダム市立美術館、シロス近代美術館（ギリシャ）などで個展開催。

**Douglas Gordon**  
 ダグラス・ゴードン

1966年グラスゴー生まれ。現在、グラスゴーとニューヨークに在住。

グラスゴー美術学校とロンドンのスレイド美術大学に学ぶ。罪悪感と恐怖感、愛と死など実存主義的なテーマや、記憶と視覚の問題と対峙する。主に、フィルム、ビデオ、写真、絵画、パフォーマンスを用いて、これらの問題を指摘し、反復や拡大、スローモーションを駆使してそれらに踏み込む。『至高の問題』は、簡潔な声明に形が変えられ、新たな方法で読むことや再考察できるようになる。05年、映画《ジダン：神が愛した男》をフィリップ・パレノと共に監督。97年 ヴェネチア・ビエンナーレ、ミュンスター彫刻プロジェクト、07年 アテネ・ビエンナーレに参加。06年 カンヌ国際映画祭に参加。世界の主要美術館での個展、グループ展多数開催。日本では98年 群馬県立近代美術館「ヨーロッパの8人」、栃木県立美術館他「リアル/ライブ イギリスの新しい美術」、01年 東京オペラシティ・アートギャラリー、広島現代美術館「汚名—アルフレッド・ヒッチコックと現代美術」に出品。96年 ターナー賞（ロンドン）、ニーダーザクセン芸術賞（クンストフェライン・ハノーファー）、97年 2000年賞（第47回ヴェネチア・ビエンナーレ）、98年 ヒューゴ・ボス賞（グッゲンハイム美術館）、市長賞（グラスゴー市議会）、セントラル芸術賞（ケルン・クンストフェライン）を受賞。

## アーティスト資料

### Rodney Graham

ロドニー・グラハム

1949年 バンクーバー生まれ。現在、バンクーバーに在住。

プリティッシュ・コロンビア大学で美術史を学ぶ。グラハムの作品は、写真、フィルム、パフォーマンス、音楽、テキストなど、ジャンルやメディアを超えた組み合わせの多様性が特徴である。作品それぞれの根底には、文学や哲学のリファレンスと視覚的語呂合わせを複合的な物語に組み込んだ、歴史的文脈が流れている。また、ギタリスト、歌手としても活動している。97年 ヴェネチア・ビエンナーレ カナダ代表（03年も）、01年 イスタンブール・ビエンナーレ、03年 リヨン・ビエンナーレ、06年 ホイットニー・バイアニュアル、07年 アテネ・ビエンナーレなどに参加。世界の主要美術館での個展、グループ展多数開催。日本では、95年 世田谷美術館「クロッシング・スピリッツ」、07年 森美術館「笑い展」に出品。06年 クルト・シュヴィッターズ賞（ニーダーザクセン貯蓄銀行財団）を受賞。

### Shilpa Gupta

シルパ・グプタ

1976年ムンバイ生まれ。現在、ムンバイに在住。

1997年にムンバイのサー・JJ芸術学院を卒業。民族やジェンダー、宗教、人種、階級、経済格差など、グローバリゼーションが進む現代における様々な社会問題を一貫して提起。ビデオやインターネットなどのマルチメディアを用い、鑑賞者とのインタラクティブな関係を構築することで作品を完成させる。2004年メディア・シティ・ソウル・ビエンナーレ、06年シドニー・ビエンナーレ、リバプール・ビエンナーレ、上海ビエンナーレ、07年リヨン・ビエンナーレ、アート・ブリュッセルなど多数の国際展に参加。04年オクスフォード・ブックストア（ムンバイ）、06年ボーズ・バシア・ギャラリー（ニューヨーク）、07年アーティスト・スタジオ（ロンドン）等で個展を開催。01年テート・モダン（ロンドン）、06年広島市現代美術館、タイムラー・クライズラー・コンテンポラリー（ベルリン）、07年現代美術館（台北）、ナショナル・ギャラリー・オブ・モダンアート（ムンバイ/デリー）等のグループ展に出品。04年ベルリンのトランスメディアール・アワードを受賞。

### Haino Keiji

灰野 敬二

1952年千葉生まれ。現在、東京に在住。

1971年に日本初のインプロヴィゼーションバンド「ロストアラフ」を結成。以降、現在に至るまで、ロック、サイケデリック、ノイズ、フリージャズ、民族音楽など、ジャンルを自在に横断しながら、日本の現代音楽の前衛的傾向を主導。79年、以後メインバンドとなる「不失者」を結成、また98年には童謡や歌謡曲をアレンジした独創的なカバーバンド「哀秘謡」を結成するなど、時代ごとにスタイルを変えながら活動を展開。またミュージシャンのみならず、舞踏家、詩人、劇団など様々なジャンルのアーティストとのコラボレーションにも精力的に取り組んでいる。

### Sharon Hayes

シャロン・ヘイズ

1970年ボルティモア生まれ。現在、ニューヨークに在住。

ホイットニー・インディペンデント・スタディ・プログラム（ニューヨーク）を経て、カリフォルニア大学で美術を学ぶ。演劇、映画、人類学、言語学、ジャーナリズム等の方法論を援用して、映像、パフォーマンス、インスタレーションなどメディアを横断した制作を展開する。2007年にニューヨークの新現代美術館で個展「私は自由を求めるパレードに参加するが、あなたを愛する限り私は自由ではない」を開催。07年、「25年後：ウェルカム・トゥー・アート・イン・ジェネラル」（UBSギャラリー、ニューヨーク）、08年、「彼女について私が知っている2、3の事柄」（カーペンター視覚芸術センター、ケンブリッジ）等のグループ展に参加。

### Christian Holstad

クリスチャン・ホルスタッド

1972年アナハイム生まれ。現在、ニューヨークに在住。

1994年カンザスシティ美術大学を卒業。ホルスタッドは、認知、とりわけ、触覚および神経学と精神の昇華の状態における素早い関係に興味を持つ。これらの研究から、それ自身の瞑想的プロセスを強調する独特なアートの実践を生み出した。インスタレーション、ドローイング、彫刻、パフォーマンス、織り、コラージュといった多様な素材が同時に用いられる。彼は、過去と現在のアメリカの通俗的で破壊的な文化、特にディスコとゲイ・カルチャーに鮮やかな賛辞を贈る。2000年 ホイットニー・バイアニュアル（04年も）、04年プラハ・ビエンナーレ、05年 モスクワ・ビエンナーレ、07年 リヨン・ビエンナーレに参加。世界の主要美術館での個展、グループ展多数開催。

**Cameron Jamie**

キャメロン・ジェイミー

1969年ロサンゼルス生まれ。現在、パリに在住。

ジェイミーは、アメリカの歴史と文化を扱い、具体的にその機能不全を明示する作品を、ビデオ、パフォーマンス、彫刻、ドローイングを融合させて制作する。彼の研ぎ澄まされた批判的な眼は、大衆文化とそれが日常生活や心理に及ぼす影響を見つめる。また、科学と法医学人類学（出土した骨や白骨化した骨を人類学的アプローチで調査・研究する学問）によって作られた彼自身の方法論でアメリカの弱点を顕在化させる。彼の錯綜した作品は、彼自身のフォークロアと神話をバックグラウンドにしている。05年 ヴェネチア・ビエンナーレ、06年 ホイットニー・バイアニュアルに参加。06年 ウォーカー・アート・センター（ミネアポリス）、07年 マサチューセッツ工科大学リスト・ヴィジュアル・アーツ・センターで個展開催。世界の主要美術館での個展、グループ展多数開催。日本では、2000年 パルコ・ギャラリー（渋谷）「Kim'sBedroom」に出品。

**Kuswidananto a.k.a. Jompet**

クスウィダナント・ジョンペット

1976年ジョグジャカルタ生まれ。現在、ジョグジャカルタに在住。

ガジャマダ大学で社会学と政治学を学ぶ。ジョンペットは、社会における「他者」と「私」を模索しその在りようをみつめる。さまざまな電子楽器や動くオブジェにみる視覚イメージを用い、パフォーマンスによる表現を試みる。2002年 第1回バンドン・ビデオ・ニューメディア・アート・フェスティバル（インドネシア）、03年 第7回ジョグジャカルタ・ビエンナーレ、ジャカルタ・ビデオアート・フェスティバル、05年 第2回CPビエンナーレ（ジャカルタ）に参加。03年 アンブレラ・スタジオ・コンテンポラリー・アート（オーストラリア）、マロニエ・アートセンター（ソウル）、04年 チェンマイ美術館（タイ）、アート・ハウス（シンガポール）、SBS（ソウル）、07年 ステナーセン美術館（オスロ）などでのグループ展出品。日本では、05年 第3回福岡アジア美術トリエンナーレ（福岡アジア美術館）に出品。

**Joan Jonas**

ジョーン・ジョナス

1936年ニューヨーク生まれ。現在、ニューヨークに在住。

65年ニューヨークのコロンビア大学大学院（彫刻）を修了。60年代末より鏡などの小道具、映像とパフォーマンスを組み合わせた作品を展開、新しいパフォーマンスの先駆者として高い評価を受ける。様々な文学や神話を引用し、フィルム、ビデオ、インスタレーション、パフォーマンスなど多様なメディアにより儀式的な或いは日常的な行為を展開、身体、記憶、アイデンティティについて問いかける。72年 ドクメンタ5（77、82、87、02年も）、73年 サンパウロ・ビエンナーレ、82年 シドニー・ビエンナーレ、94年 リヨン・ビエンナーレ、02年台北ビエンナーレに参加。世界各地の美術館で個展、グループ展多数開催。最近では03年 ニューヨークのクイーンズ・ミュージアム、04年 テート・モダンで個展開催。日本では07年 CCA北九州で個展開催。

**Miranda July**

ミランダ・ジュライ

1974年バレー（ヴァーモント州）生まれ。現在、ロサンゼルスに在住。

ジュライは、パフォーマンス、著述、音楽、演技、映画製作を、さまざまに組み合わせ、あるいはすべてを同時に行う。社会的行動への彼女の鋭い観察力が、彼女の当惑させるけれども人を惹きつける物語や、日常体験に立ち向かおうと努力するものの、非機能的で抗いきれないキャラクターのベースを形づくる。01年 ロッテルダム国際映画祭、02年 ホイットニー・バイアニュアル（04年も）、05年 サンダンス・フィルム・フェスティヴァル、カンヌ国際映画祭に参加。日本では、映画《君とボクと虹色の世界》が知られている。05年 サンダンス・フィルム・フェスティヴァル 審査員特別賞、カンヌ国際映画祭 カメラ・ドール（新人監督賞）を受賞。

**Mike Kelley**

マイク・ケリー

1954年デトロイト生まれ。現在、ロサンゼルス在住。

1978年カリフォルニア・インスティテュート・オブ・アーツ大学院を修了。70年代から80年代にかけて、象徴的で儀式的なパフォーマンスを中心に活動。やがて80年代末から日用品やぬいぐるみを使った彫刻を制作、さらに近年は学校、オフィス、動物園などを模した大規模で総合的なインスタレーションを発表。聖と俗、愛と憎しみなど相反する要素を内包したおぞましいオブジェやイメージを通して、制度的に抑圧された現代人の心理を暴くような仕事を展開し、国際的に高い評価を得ている。84年 シドニー・ビエンナーレ、85年 ホイットニー・バイアニュアル（89、91、93、95、02年も）、88年ヴェネチア・ビエンナーレ、91年 カーネギー・インターナショナル、92年 ドクメンタ9（97年も）、01年 リヨン・ビエンナーレ（03年も）、07年 ミュンスター彫刻プロジェクトに参加。世界各地の美術館で個展、グループ展多数開催。日本では、87年 富山県立近代美術館「富山国際現代美術展」、97年 世田谷美術館「アメリカン・ストーリー—移動と変容の中で」展に出品。

## アーティスト資料

### Hassan Khan

ハッサン・カーン

1975年ロンドン生まれ。現在、カイロに在住。

カイロ・アメリカン大学に学ぶ。約1600万人が住むアフリカ最大級の大都市カイロに在住するハッサン・カーンの興味は、一貫して大都市とその住民たちにある。ビデオやパフォーマンス、テキスト、音楽など多岐にわたるメディアを用いて表現した作品は、都市と人々、権力や階級、文化など都市が抱える様々な問題をそのまま映し出し、都市社会で形成される自己のありようについて多様な視点からアプローチしている。2003年イスタンブール・ビエンナーレ、05年トリノ・トリエンナーレ、06年シドニー・ビエンナーレ、07年テサロニキ・ビエンナーレ等に参加した他、国内外のグループ展に多数出品。04年ギャラリー・シャントラル・クルーセル（パリ）、05年スペース・ギャラリー（トロント）、06年ガスワークス（ロンドン）、07年ル・プラトー（パリ）等で個展開催。

### Pichet Klunchun

ピチェ・クランチェン

1971年タイ生まれ。現在、タイに在住。

16歳からタイの伝統的仮面舞踊「Khon（コーン）」を学びはじめ、チュラロンコン大学（バンコク）美術学部で舞踊とダンスを専攻。タイの古典的ダンススタイルに現代性を取り入れたパフォーマンスを創作し、1998年のアジア競技大会（バンコク）開会式・閉会式の共同演出、99年「バンコク・サウンド・アンド・ライト・ショー」への出演など、ダンサー、振付家として活動を展開。2000年からはシンガポールの演出家オン・ケンセン率いる「フライング・サーカス・プロジェクト」の公演に参加。07年には第5回大阪・アジア・コンテンポラリー・ダンス・フェスティバルに招かれ、2週間の滞在制作、ワークショップ、公演をおこなった。

### Terence Koh

テレンス・コー

1977年北京生まれ。現在、ニューヨークに在住。

エミリー・カー美術大学（バンクーバー）で学ぶ。コーは、ハンドメイド・ブック、同人誌、版画、写真、彫刻、パフォーマンス、インスタレーションと多岐にわたって創作している。この多様な制作のほとんどは、同性愛者、パンク、性的な感性の影響によるものである。04年ホイットニー・バイアニュアルに参加。05年ヤバ・ブエナ美術センター「ヒッピーズ」（サンフランシスコ）、06年ボイマンス美術館「ダーク」（ロッテルダム）、PS1「ザ・ゴールド・スタンダード」（ニューヨーク）、ロイヤル・アカデミー「アメリカの現在」（ロンドン）に出品。06年クンストハレ・チューリッヒ、07年ホイットニー美術館、08年シルン・クンストハレで個展開催。

### Kosugi Takehisa

小杉 武久

1938年東京生まれ。現在、大阪とニューヨークに在住。

1962年、東京藝術大学音楽学部楽理科を卒業。日用品やエレクトロニック・テクノロジーを用いて、音によるパフォーマンスやインスタレーションを行い、空間における音の多様性を表現する。60年、日本で最初の即興演奏集団「グループ・音楽」を塩見允枝子、刀根康尚、水野修孝らと結成。「フルクサス」に参加し、活動の場を海外にも広げる。69-76年、「タージ・マハル旅行団」を結成しさまざまな場所で即興演奏を行った。70年、大阪万博「お祭り広場」の環境音楽などエレクトロニクスを用いた独自の表現の作品で作曲家としても注目される。77年のアメリカ移住以来、マース・カニングハム舞踊団の作曲家／演奏家としてジョン・ケージ、デヴィッド・チュードアラと活動。95年から同舞踊団の音楽監督を務める一方、個人としても、世界各地でのコンサート活動とともに、サウンド・インスタレーションを発表している。93年リヨン・ビエンナーレに参加。近年では、02年神奈川県立近代美術館 鎌倉「WAVES」、03年愛知県美術館「WIND」などの個展開催。94年一貫してミュージック・シーンの最先端を担ってきた活動によって、第2回ジョン・ケージ・アワード・フォー・ミュージックを受賞。

### Mark Leckey

マーク・レッキー

1964年バーケンヘッド（イギリス）生まれ。現在、ロンドンに在住。

1990年、ニューカッスル・ポリテクニク（現ノーザンブリア大学）を卒業。レッキーは、極限まで純化された世紀末のデカダンスから、80年代の服やクラブ・カルチャーににわたる文化を体現する作家である。アンダーグラウンド音楽、ファッション、クラブ・カルチャーを反映したビデオ、パフォーマンス、サウンド・システム・インスタレーションを制作している。04年マニフェスタ5、06年テート・トリエンナーレに参加。ヨーロッパ、アメリカで個展、グループ展多数開催。日本では、07年イメージフォーラム・フィルム・フェスティバル福岡会場で《巨大な白蛮族の行進》上映。08年セントラル芸術賞（ケレン・クンストフェライン、セントラル生命保険会社）を受賞。

**Tim Lee**  
 ティム・リー

1975年ソウル生まれ。現在、バンクーバーに在住。

1999年アルバータ大学（エドモントン）を卒業後、2002年プリティッシュ・コロンビア大学（バンクーバー）にてMFAを取得。ティム・リーは、ミュージシャンやスポーツ選手などアメリカンのポップアイコン達の象徴的な瞬間を自ら演じ、それらを美術史と組み合わせることで作品を完成させる。03年ブラハ・ビエンナーレ、08年ペリトリコ・トリエンナーレ、シドニー・ビエンナーレに参加。05年MoMA(ニューヨーク)、MuHKA（アントワープ）、06年テート・モダン（ロンドン）、07年森美術館（東京）など世界各地のグループ展に出品。08年CCA Wattis 現代アート研究所(サンフランシスコ)、ヒューストン現代美術館、09年ハイワード・ギャラリー（ロンドン）などにて個展開催。

**Renata Lucas**  
 レナータ・ルーカス

1971年リベランプレト（ブラジル）生まれ。現在、サンパウロおよびリオデジャネイロに在住。

カンピーナス州立大学（ブラジル）で美術を学ぶ。テート・モダン「舞台としての世界」（2005）等のグループ展に参加するほか、サンパウロのミラン・アントニオ・ギャラリー（2006）をはじめ、ブラジル国内、ロサンゼルス、ロンドンで個展を開催。設置される空間についての緻密な分析にもとづいて、建築的性格の強いインスタレーションを制作。都市空間における内と外、社会と個人、過去と現在の関係を浮き彫りにする。2006年のサンパウロ・ビエンナーレに出品。また今年の6月18日に開幕したシドニー・ビエンナーレにも参加している。

**Jorge Macchi and  
 Edgardo Rudnitsky**  
 ホルヘ・マキと  
 エドガルド・ルドニツキー

ホルヘ・マキ 1963年ブエノスアイレス生まれ。現在、ブエノスアイレスに在住。  
 エドガルド・ルドニツキー 1956年ブエノスアイレス生まれ。現在、ベルリンに在住。

マキの作品は、逸話、イメージ、オブジェ、音を本に閉じ込めるように、はかない瞬間を記録することで構成される。見過ごされやすい、つかの間の音と神秘的なめぐり合わせが構成要素となり、詩的でメランコリックな雰囲気が微かに漂う。作品は、ビデオ・インスタレーションや新聞の切り抜きのコラージュなど、様々なメディアや方法を用いて制作される。一方、作曲家、サウンドアーティスト、パーカッションistであるルドニツキーは、コンテンポラリーダンス、パフォーマンス、フィルム、舞台セットといった分野においても、作曲家やサウンドデザイナーとして活動を展開している。二人は、89年以来コラボレーションを行ってきており、第8回イスタンブール・ビエンナーレで《ブエノスアイレス・ツアー》（2003）、第51回ヴェネチア・ビエンナーレでは《キリストの昇天》（2005）を発表している。

**Gustav Metzger**  
 グスタフ・メッツガー

1926年ニュルンベルク生まれ。現在、ロンドンに在住。

ポーランド系ユダヤ人の両親をもつメッツガーは、ユダヤ人の子供を受け入れる運動によって英国に救出され、亡命した。彼は、破壊芸術の提唱者であり、フルクサスの活動にも深くかかわっていた。破壊芸術は、資本主義体制と芸術産業を攻撃することを意図している。1990年代から、歴史的写真のシリーズを制作している。それは、彼がユダヤ人として、ホロコーストから生き残ることができた歴史に由来する。03年 ヴェネチア・ビエンナーレ、05年 ヴァレンシア・ビエンナーレ、07年 シャルジャ・ビエンナーレ（アラブ首長国連邦）、ミュンスター彫刻プロジェクト、キュヴェ・ビエンナーレ（リンツ）などに参加。02年 カールスルーエ近現代美術館、04年 テート・ブリテン、ICAロンドン、05年 テート・リバプール、08年 レイキャピック美術館などでのグループ展に出品。99年 ニュルンベルク・クンストハレ、05年 キュービット・アーティスト（ロンドン）、06年 バーゼル・クンストハレ、07年 ワルシャワ国立美術館などで個展開催。

**Naito Rei**  
 内藤 礼

1961年広島生まれ。現在、東京に在住。

1985年武蔵野美術大学を卒業。内藤は、繊細な物質や素材を用いて静謐な空間を作る。これら物質、空間、空気のすべてがインスタレーション作品となり、観客と一体化する。小さく、密やかなものを通して、この世にあるささやかな存在に対する命を問いかける。93年 プロスペクト（フランクフルト）、97年 ヴェネチア・ビエンナーレ 日本館、06年 光州ビエンナーレに参加。02年 川村記念美術館「眠り／夢／覚醒」、05年 ケンパー現代美術館「ディセレイト」（カンザス）、06年 青森美術館「縄文と現代」、07年 イヴォン・ランペール「キスはしないよ」（パリ）などに出品。97年 カルメル会修道院（フランクフルト）、05年 アサヒビール大山崎山荘美術館（京都）、06年 佐久島弁天サロン／屋外（愛知）、07年 発電所美術館（富山）などで個展開催。95年 日本現代芸術奨励賞（日本文化芸術財団）、03年 第一回アサヒビール芸術賞を受賞。

## アーティスト資料

### Nakanishi Natsuyuki

中西 夏之

1935年東京生まれ。現在、伊東に在住。

東京藝術大学油画科に学ぶ。1950年代から今にいたるまで、土方巽や大野一雄をはじめとする舞踏家とコラボレーションを行うなど、絵画の枠に縛られない独創的な表現活動を行ってきた。60年代、読売アンデパンダン展やハイレッド・センターの活動のなかで、前衛的なオブジェやパフォーマンスを発表し注目された。近年は、独自の思想のもと、絵画制作を精力的に行っている。74年 ルイジアナ美術館（デンマーク）、83年 デュッセルドルフ州立美術館、85年 オックスフォード近代美術館、86年 ポンピドゥー・センター、94年 横浜美術館、グッゲンハイム・ソーホー、98年 国立国際美術館、02年 東京国立近代美術館、04年 森美術館、06年 東京オペラシティ・アートギャラリー、07年 国立新美術館などでのグループ展に出品。

### Nakaya Fujiko

中谷 芙二子

1933年札幌生まれ。現在、東京に在住。

1957年米国ノース・ウエスタン大学を卒業。画家としてキャリアをスタートした。70年、大阪万博「ペプシ館」で“霧の彫刻”を初めて制作し、以降、人工霧を環境、公園、モニュメントなどに用いた作品を世界各地で制作／設置している。92年 昭和記念公園子供達の森、94年 中谷宇吉郎雪の科学館中庭、96年 岡崎市美術博物館前庭、99年 グッゲンハイム美術館（ビルバオ）に設置。01年 ヴァレンシア・ビエンナーレ（映像クリエイター 高谷史郎とコラボレーション、スペイン）、03年 ICC「E.A.T.-芸術と技術の実験」（東京）、05年 ラトビア自然博物館「雪と氷との対話」に出品。02年 舞踏家トリシャ・ブラウン（アンドヴァー他）、04年 舞踏家 田中泯（山梨）、07年 音楽家 ヨハン・ヨハンソン（日本未来科学館）とコラボレーションを行う。76年 オーストラリア文化賞（シドニー・ビエンナーレ）、93年 吉田五十八賞特別賞を受賞。83年水の彫刻国際コンペ入選（ニューオリンズ）。

### Hermann Nitsch

ヘルマン・ニツチ

1938年ウィーン生まれ。現在、ウィーンに在住。

ウィーンでグラフィックアートを学んだ後、50年代後半総合芸術の構想を練る。60年代過激なパフォーマンスを特徴とするウィーン・アクションリストの一人として注目される。72年 ドクメンタ5（82年も）、88年シドニー・ビエンナーレに参加。71年に購入したプリンツェンドルフ城（オーストリア）を中心に世界各地でパフォーマンスを行い、また各地の美術館で個展、グループ展多数開催。最近では01年にベルリンのハンブルガー・バーンホーフ、02年にロンドンのホワイット・チャペル・アート・ギャラリーで個展開催。07年にオーストリアのミステルバッハにヘルマン・ニツチ美術館オープン。日本では99年 東京都現代美術館の「アクション：行為がアートになるとき 1949-1979」に出品。

### Ohmaki Shinji

大巻 伸嗣

1971年岐阜生まれ。現在、東京に在住。

1997年東京藝術大学大学院を修了。「トーキョーワンダーウォール2000」に《Opened Eyes Closed Eyes》で入選以来、《ECHO》（資生堂ギャラリー、東京画廊、岡本太郎美術館）、《Liminal Air》（東京ワンダーサイト、ギャラリーA4）など、展示空間を非日常的な世界に生まれ変わらせ、鑑賞者の身体的な感覚を呼び覚ます、ダイナミックなインスタレーション作品を次々と発表。03年 静岡県立美術館、川崎市岡本太郎美術館、千葉市美術館、05年 青山スパイラルガーデン、06年 ルートウィヒ・フォーラム（アーヘン）、07年 モンイン・アートセンター（ソウル）、愛知県立美術館、広州美術館、08年 水戸芸術館現代美術センターなどでのグループ展出品。98年 ギャラリーK、2000年 東京都庁、04年 レッド・ミル・ギャラリー（ヴァーモント州）、07年 府中市美術館、金沢21世紀美術館などで個展開催。97年 キリンコンテンポラリー・アワード奨励賞、03年 第6回岡本太郎記念現代美術大賞特別賞を受賞。

### Ono Yoko

オノ・ヨーコ

1933年東京生まれ。現在、ニューヨークに在住。

1952年学習院大学に入学した翌年アメリカに移住し、サラ・ローレンス大学で作曲と詩を学ぶ。60年からニューヨークを拠点に活動を開始し、前衛芸術グループ「フルクサス」に参加。66年からは活動の拠点をロンドンに移し、69年にビートルズのジョン・レノンと結婚。93年ヴェネチア・ビエンナーレ、01年横浜トリエンナーレに参加。2000年ニューヨークのジャパン・ソサエティ・ギャラリーを皮切りに、ヒューストン現代美術館、サンフランシスコ近代美術館、マイアミ美術館において大規模な回顧展「YES オノ・ヨーコ展」が巡回。その後、03年から1年にわたり、水戸芸術館、広島市現代美術館、東京都現代美術館などを巡回した。

## Pak Sheung Chuen

パク・シュウン・チュエン／白雙全

1977年福建省生まれ。現在、香港とニューヨークに在住。

1984年香港に移住。2002年香港中文大学を卒業。コンセプチュアル・アーティストとして活躍する傍ら、04年から2年間、明報日刊新聞の日曜版にてコラムを連載。05年、書籍を2冊出版。パク・シュウン・チュエンは、ビジュアルとテキストを混在させたドキュメント・ビデオやコラージュ作品を制作している。彼が撮るのは一見当たり前な日常生活だが、それらは美しく不条理な詩情を含み、鑑賞者の日常生活に対し新たな認識を提示する。06年釜山ビエンナーレ、イエロー・ボックス・アート・プロジェクト（上海）など国内外のグループ展に出品。06年WAAアート・スペース（ワルシャワ）、08年ビタミン・クリエイティブ・スペース（広州）等にて個展開催。日本では、07年現代美術製作所「見知らぬ人々」展に出品。06年より1年間、アジア文化協会（香港）よりリー・ハイサン奨学基金を受けニューヨークに滞在。

## Philippe Parreno

フィリップ・パレノ

1964年オラン（アルジェリア）生まれ。現在、パリに在住。

グルノーブル国立高等美術学校で学んだのち、パレ・ド・トーキョー付属造形美術高等学校に学ぶ。1990年代初頭からビデオや16mmフィルムによる作品を数多く制作する一方、他のアーティスト、他分野のクリエイターや一般市民とコラボレーション（協働）することによって、展覧会の新しいあり方を提示する。05年、映画《ジダン：神が愛した男》をダグラス・ゴードンと共に監督。90年ヴェネチア・ビエンナーレ（93、95、97、99、07年も）、91年リヨン・ビエンナーレ（97、03年も）、01年イスタンブール・ビエンナーレ、03年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ、04年現代アフリカン・ビエンナーレ、05年光州ビエンナーレ、06年テート・トリアニュアル、リバプール・バイアニュアルなどに参加。06年カンヌ国際映画祭、07年サンダンス・フィルム・フェスティバル、ロッテルダム国際映画祭に参加。日本では、01年東京オペラシティ・アート・ギャラリー「エゴフォーガル：イスタンブール・ビエンナーレ東京」に出品。

## Falke Pisano

ファルケ・ピサノ

1977年アムステルダム生まれ。現在、アムステルダムに在住。

ユトレヒト美術大学で彫刻、ギルドホール大学（ロンドン）で美術を学ぶ。美術研究者でもあるピサノは、思考することと構築の可能性を言語において解決しようと試みる。彼女の作品は、通常テキストがベースとなっており、抽象的なオブジェを用いて関心事を明快にあらわす。2001年アカデミーギャラリー（ユトレヒト）、06年アムステルダム市立美術館、ルーベン・アートセンター（ベルギー）、07年アーティスト・スペース（ニューヨーク）、リッソン・ギャラリー（ロンドン）、08年エスパス・ダルテ・コンテンポラン（ジュネー）、ブダペスト市立絵画ギャラリーなどでのグループ展出品。06年ヒスコックス芸術賞受賞。

## Michelangelo Pistoletto

ミケランジェロ・ピストレット

1933年ピエツラ（イタリア）生まれ。現在、トリノに在住。

修復の修行と並行して、1947年に絵画の制作を始める。62年、鏡のように表面を磨いたステンレススチールに等身大の人間を描いた作品（ミラー・ビクチャー）で世界的に注目されるようになり、60年代のポップアートを牽引し続けた。また、98年には、ピストレット財団を設立し、その財団に開設したUNIDEEにおいて、多岐にわたる分野がアートと融合できることを提唱。66年ヴェネチア・ビエンナーレ（68、76、78、84、86、93、95、99、03、05年も）、68年ドクメンタ（82、92、97年も）、95年ホイットニー・バイアニュアル、98年ベルリン・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレ、01年イスタンブール・ビエンナーレ、07年リヨン・ビエンナーレなどに参加。97年ニューヨーク近代美術館、99年ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム、05年パリ市立近代美術館などで個展開催。日本では2000年CCA北九州、02年東京オペラシティ・ギャラリーなどで紹介。03年ヴェネチア・ビエンナーレで金獅子賞受賞。

## Mathias Poledna

マティアス・ポレドナ

1965年ウィーン生まれ。現在、ロサンゼルスに在住。

ウィーン応用芸術大学とウィーン大学に学ぶ。ポレドナは、映像、インスタレーション、サイト・スペシフィック・プロジェクトなどの作品のほか、映画、建築、デザインのモダニズムの歴史や、大衆文化と前衛との相互関係をあらわす。04年第3回ベルリン・ビエンナーレ、リバプール・ビエンナーレ、06年ホイットニー・バイアニュアルに参加。03年CCA（サンフランシスコ）、フランクフルト・クンストフェレイン、04年アムステルダム市立美術館などでのグループ展出品。03年ルートヴィヒ美術館（ウィーン）、07年ハマー美術館（ロサンゼルス）、08年シカゴ現代美術館などで個展開催。

## アーティスト資料

### Stephen Prina スティーヴン・プリナ

1954年イリノイ州ゲールズバーグ（アメリカ）生まれ。現在、マサチューセッツ州ケンブリッジおよびロサンゼルスに在住。

1980年カリフォルニア・インスティテュート・オブ・アーツ大学院を卒業。プリナは美術作品そのものではなく、作品が生まれ出された後の様々な流通、享受のシステム——美術館、市場、歴史的な位置づけ——に鑑賞者の目を向けようとする。彼が属するバンド、「レッド・クレイオラ」の名前で音楽作品をポピュラー・ミュージックとして流通させている。90年ヴェネチア・ビエンナーレ、91年カーネギー・インターナショナル、92年ドクメンタ9、01年サンタ・フェ・バイアニュアル（02年も）、08年ホイットニー・バイアニュアルに参加。最近では03年にドイツのバーデン・バーデン・クンストハレで個展開催。日本では91年世田谷美術館他での「拡張する美術展」に出品。

### Nick Relph & Oliver Payne ニック・レルフ & オリヴァー・ペイン

ニック・レルフ 1979年ロンドン生まれ。現在、ロサンゼルスに在住。  
オリヴァー・ペイン 1977年ロンドン生まれ。現在、ロサンゼルスに在住。

両名ともキングストン大学芸術学部で学ぶ。1999年以来、ペインとレルフは共に、作用とアプローチの多様な方向性を組み合わせたフィルムを制作してきている。彼らの作品は、ロンドンとその周辺をダイレクトに映し出し、いたるところの若者文化の間で共感を得ている。現代社会における新しい時代の社会規範に合致する、抑圧された現状、不毛、若いエネルギーを背景とした若者の葛藤、そしてイギリスの美術界の現況が、それぞれのフィルムに共通した意義深いテーマとなっている。03年ヴェネチア・ビエンナーレ、テート・トリアニュアル（06年も）、ブラハ・ビエンナーレ、04年カーネギー・インターナショナルなどに参加。世界の主要な美術館でのグループ展、国内外での個展多数開催。日本では、04年水戸美術館「孤独な惑星」に出品。03年金獅子（最優秀）賞（第50回ヴェネチア・ビエンナーレ、若手作家部門）を受賞。

### Pedro Reyes ペドロ・レイエス

1972年メキシコ・シティ生まれ。現在、メキシコ・シティに在住。

レイエスは、建築家としての教育を受けてきたことから、作品の根底に、構造デザインや建築の原理が備わっている。彼は、社会空間におけるモダニズム観念、環境問題、地域社会の相互関係に注目し、知識が分類され、あるいは正当化される方法についてありきたりの仮定を否定する、複雑なシステムを作品に組み込む。単純な手段と何気ない筋書きを用いて、ユートピアと儀式、個々の幻想と集合体の野心、精神性とパタフィジックス（現代科学のパロディとしてアルフレッド・ジャリによって考案された概念）を混ぜ巧みに取り扱う。レイエスは、理想主義者であり、世界を向上させる方法を考えながら、生活し、制作している。03年ヴェネチア・ビエンナーレに参加。02年P.S.1「メキシコ・シティ」（ニューヨーク）、04年ICAボストン他「メイド・イン・メキシコ」、07年ワルシャワ国立美術館「メキシコ万歳！」に出品。04年ガレリア・エンリケ・グエッレロ（メキシコ・シティ）、06年アスペン美術館、07年イヴォン・ランベール（ニューヨーク）で個展開催。日本では、03年越後妻有アートトリエンナーレに参加。

### Jimmy Robert ジミー・ロベール

1975年グアドループ生まれ。現在、ブリュッセルに在住。

美術と評論をゴールドスミス・カレッジ（ロンドン）で学ぶ。ウィーン応用芸術大学とウィーン大学に学ぶ。ロベールは、彫刻、版画、インスタレーション、パフォーマンスなど多岐にわたって制作し、ダンスと視覚芸術とを関連付けることを試みる。03年第47回ロンドン・フィルム・フェスティバル、05年フライズ・アート・フェア、07年パーゼル・アート・フェア、08年第5回ベルリン・ビエンナーレに参加。02年フォトグラフィーズ・ギャラリー（ロンドン）、03年テート・ブリテン、06年アムステルダム市立美術館、ポンビドー・センター、07年ホワイトチャペル・アートギャラリーなどに参加。04年テート・ブリテン、08年キュービット・ギャラリー（ロンドン）などで個展開催。

### Sasamoto Aki 笹本 晃

1980年横浜生まれ。現在、ニューヨークに在住。

ウェスリアン大学（コネティカット州ミドルタウン）で美術とダンス、コロムビア大学美術大学院（ニューヨーク）視覚芸術部門で彫刻と新領域芸術を学ぶ。個人の精神状態やパーソナリティーの表象としての日常的習慣や些細な仕草をモチーフに、パフォーマンスをはじめ、彫刻、インスタレーションなど、多様なメディアを用いた創作活動をおこなう。ニューヨークを活動拠点として、パフォーマンスイベントや展覧会を精力的に開催している。ジャンル横断的なイベントを企画実施するアートユニット「カルチャー・プッシュ」の創設メンバーの一人。

**Tino Sehgal**  
 ティノ・セーガル

1976年ロンドン生まれ。現在、ベルリンに在住。

エッセンとベルリンで経済学とダンスを学ぶ。一切ものとしての作品は制作も展示もせず、美術展に来る観客がパフォーマーや監視員によって、ある体験をするような状況を設定する。観客はこれらの過程を通して、芸術や社会について考え直すことになる。彼はまた写真や書類など作品について記録は一切残さないで、作品はただ観客の記憶の中に残るだけとなる。02年 マニフェスタ（フランクフルト）、03年 ヴェネチア・ビエンナーレ、05年 ヴェネチア・ビエンナーレ ドイツ代表。06年 テート・トリエンナーレ、07年 リヨン・ビエンナーレに参加。07年 ICAロンドン（05、06年も）、07年 フランクフルト近代美術館、07年 ウォーカー・アート・センター（ミネアポリス、アメリカ）で個展開催。日本では05年 横浜トリエンナーレに出品。

**Tanaka Min**  
 田中 湊

1945年東京生まれ。現在、山梨に在住。

1965年東京教育大学（現 筑波大学）を中退。クラシック・バレエやモダン・ダンスを学んだ後、独自の舞踊を求め、独自の身体表現を探り当てた。土方巽に私淑し、自らを「私は地を這う前衛である」としている。06年以降、劇場空間での公演に一区切りをつけ、屋外（街、神社など）や野外（野山、海辺など）で自在にその場を舞う《場踊り》を展開している。近年、俳優としても活動しその活躍の場を広げている。また、06年 NPO 法人を設立し、インドネシアー永遠の森プロジェクトと甲斐市の農林事業を開始した。04年「ダンス白州2004」で中谷芙二子とのコラボレーション作品《空間に恋して》を上演。82年 ミュンヘン演劇祭、06年ザルツブルク音楽祭に参加。03年 映画《たそがれ清兵衛》に初出演。79年 舞踊批評家協会賞（95、98、03年も）、95年 サントリー地域文化賞、01年 日本現代芸術振興賞、03年 日本アカデミー賞 最優秀助演男優賞／新人賞、キネマ旬報新人賞、06年 朝日舞台芸術賞を受賞。90年 フランス政府より芸術文化騎士章受章。

**Teshigawara Saburo**  
 勅使川原 三郎

1953年東京生まれ。現在、東京に在住。

クラシック・バレエを学んだのち、1981年から独自の創作活動を開始する。85年に宮田佳とともにKARASを結成し、既存のダンス、舞踊や舞踏の枠組みでは捉えられない新しい表現を追求している。振付け、ダンス、舞台美術、照明デザイン、衣装、音楽構成、フィルム・メイキングなどを手掛ける。光・音・空気・身体を自在に扱い、空間を質的に変化させ、独創的な世界を作り上げる。03年 パリ・オペラ座バレエ団に日本人として初めて振付。07年 ミラノ・スカラ座（個人のアーティストとして史上初）で公演。91年 軽井沢セゾン現代美術館、KPOキリンプラザ大阪、ミュンヘン、フランクフルト、92年 みなとみらい21地区倉庫、ウィーン、04年 横浜、パリ、モーブージュでインスタレーション作品発表。86年 パニョレ国際振付コンクール準優勝、特別賞（フランス）、88年 日本舞踏批評家協会賞、02年 朝日舞台芸術賞、06年 芸術選奨・文部科学大臣賞、07年 ベッシー賞（アメリカ）を受賞。

**Rirkrit Tiravanija**  
 リクリット・ティラヴァニャ

1961年プエノスアイレス生まれ。現在、ニューヨークに在住。

タイの外交官の家庭に生まれる。オンタリオ美術大学、バンフ・センター・スクール・オブ・ファインアーツ、シカゴ美術館付属美術学校、およびホイットニー・インディペンデント・スタディーズに学ぶ。テラヴァニャの作品には、観客とその場を共有する要素が含まれており、料理を振舞ったり、演奏する場を提供するプロジェクトを行う。95年 ホイットニー・パイアニュアル、98年 ベルリン・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレ、99年 ヴェネチア・ビエンナーレ、01年 イスタンブール・ビエンナーレ、07年 リヨン・ビエンナーレなどに参加。97年 ニューヨーク近代美術館、99年 ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム、05年 パリ市立近代美術館などで個展開催。日本では、01年 横浜トリエンナーレに参加、2000年 CCA北九州、02年 東京オペラシティ・ギャラリーで個展開催。04年 ヒューゴ・ボス賞（グッゲンハイム美術館）受賞。

## アーティスト資料

### Tsui Kuang-Yu

ツイ・クワンユー/崔廣宇

1974年台北生まれ。現在、台北に在住。

1997年国立台北芸術大学を卒業。2004年イギリスのガスワークス、06年オランダのライクス・アカデミーにレジデンス滞在。学生時代から一貫して、自らが演じるさまざまな行為をビデオに収めている。崔廣宇の作品は社会的に「正しい」とされる日常の一コマの中へ「間違い」とされる行為を侵すことで介入する。自虐的ユーモアを交えて撮影された崔の「アクション」は、我々が日常当たり前に享受している様々な社会の慣例に対して疑問を投げかける。04年台北ビエンナーレ、05年ヴェネチア・ビエンナーレ、06年サンパウロ・ビエンナーレなどの国際展に参加。05年graf media:gm（横浜）、アサヒ・アートスクエア（東京）、06年テート・リバプール等国内外多数のグループ展に出品。05年チェルシー・アート美術館（ニューヨーク）、06年ウィンチェスター・ギャラリー等で個展開催。03年タイシン・アーツ・アワード審査員特別賞受賞

### Danh Vo

ダン・フォー

1975年サイゴン生まれ。デンマークに移住。現在、ベルリンに在住。

ダン・フォーはベトナム共和国崩壊の年にサイゴンに生まれた。やがてシンガポールの難民キャンプへ移り、1980年、父親が作ったボートでシンガポールを脱出。タンカーに救助され、家族でデンマークに渡った。デンマーク王立芸術学院とフランクフルト市立美術大学に学ぶ。難民だったという事実は、社会との関係性において、非常に大きな意味をもたらしたと言えよう。自身にまつわる出来事や実体験をしめすことで、個人の記録資料とその個人の肉体や行為との関係に内在する社会的メタファーを問う。04年ケルン・クンストフェライン、06年タリン美術館（エストニア）、07年CCA サンフランシスコ、ミュンヘン・クンストフェラインでのグループ展に出品。05年クロースターフェルデ、ベルリン、07年ポツダム・ブランデンブルク・クンストフェラインで個展開催。07年ブラウオレンジ賞（BVR、ドイツ国民銀行ライフアイゼン銀行連邦連合会）を受賞。

### Tris Vonna-Michell

トリス・ヴォナ=ミッシェル

1982年ロッチフォード（英国）生まれ。現在、ウェストクリフ・オン・シー（英国）とベルリンに在住。

フランクフルト・アカデミーに学ぶ。ヴォナ=ミッシェルは、現在、急成長している作家である。彼は2003年以来、包括的なプロットに内包される出来事をパフォーマンスとインスタレーションで具現化する、相互関係のシリーズを制作している。物語、パフォーマンスとインスタレーションの混合、そして歴史上の出来事に対する個人的な感応による構成を発展させて行く。06年ワイト・ビエンナーレ（ロサンゼルス）、07年パフォーマンス07（ニューヨーク）に参加、08年ベルリン・ビエンナーレ、07年キュービット（ロンドン）等で個展開催。

### Claude Wampler

クロード・ワンブラー

1966年ペンシルベニア生まれ。現在、ニューヨークに在住。

1992年から2年間東京に滞在し、「友恵しづねと白桃房」で舞踏を学ぶ。97年のグラマシー・アートフェア（ニューヨーク）では4日間にわたりバイクとベッドを共にするパフォーマンスで話題をさらう。ニューヨーク大学ティッシュ芸術学校でパフォーマンスの理論を学び、99年修了。ビデオ、絵画、写真、サウンド、彫刻、コスチューム、言語などを駆使し、セクシャルで暴力的なパフォーマンスやインスタレーションを創作。ニューヨークを中心に、各国で発表を重ねている。2007年には、ワンブラーと同じく性同一性障害を抱えるクリスチャン・ホルスタッドとライアン・シェーファーとのコラボレーションによる展覧会がヒロミヨシギャラリー（東京）で開催された。

### Cerith Wyn Evans

ケリス・ウィン・エヴァンス

1958年ウェールズ（英国）生まれ。現在、ロンドンに在住。

ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートの大学院でフィルムとビデオを学ぶ。デレク・ジャーマンのアシスタントを務めるなど、80年代、ウィン・エヴァンスはまず映像作家として出発する。やがて90年代からは映像のみならず、言葉や知覚をテーマにインスタレーション、彫刻、写真など表現手段を広げる。文学や映画の歴史に言及し、コンセプチュアルな彼の仕事は、一種の意味の触媒として観客の多義的な解釈を可能にする。95年ヴェネチア・ビエンナーレ（03年も）、02年ドクメンタ11、05年イスタンブール・ビエンナーレに参加。世界各地の美術館での個展、グループ展開催。最近では06年にパリ市立近代美術館、ICAロンドン、ミュンヘン・レンパツハハウス、07年にクンストハウス・グラーツ（オーストリア）で個展を開催。日本では01年横浜トリエンナーレに参加、07年CCA北九州で個展を開催。

## Cho Minsuk and Joseph Grima with Storefront Team

### チョウ・ミンスク と ジョセフ・グリマ & ストアフロント・チーム

チョウ・ミンスク 1966年ソウル生まれ。現在、ソウルに在住。  
ジョセフ・グリマ 英国生まれ。現在、ニューヨークに在住。



Ring Dome (Milano), 2008

### 《リングドーム/Ring Dome》

《リングドーム》は1982年にNYに開設されたギャラリー「ストアフロント」の25周年にあわせ制作された。ワイヤーによるリングと乳白色のプラスチック製のフラフープを結束バンドで固定し、ドーム型に形成した作品。今年のみラノサローネ国際家具見本市ではその姿をガリレアの中に出現させ、大きな話題を呼んだ。この《リングドーム》を設計した建築家チョウ・ミンスクは、コロンビア大学大学院修士課程修了後、アメリカとオランダの建築事務所を経てソウルにて活動。2002年日本新建築国際住居建築コンペ最優秀賞、1999年及び2003年America Progressive Awards優秀賞受賞など数々の優れた建築を発表。横浜トリエンナーレ2008では直径7.5mのリングドームを制作。夜はLEDの光でライトアップし、会期中はドーム内でさまざまなイベントや、ワークショップを開催する予定。

設置場所：運河パーク（予定）  
プロジェクト協賛：Bloomberg

## Elmgreen & Dragset

### エルムグリーン&ドラッグセット

マイケル・エルムグリーン 1961年デンマーク生まれ。現在ベルリンに在住。  
インガー・ドラッグセット 1969年ノルウェー生まれ。現在ベルリンに在住。



Catch Me Shoud I Fall, 2008

### 《Catch Me Shoud I Fall》（「転んだら助けて」=仮訳）

1995年より共同での制作活動が始める。彼らの作品は、社会と密に関連し合う《ブラダ・マルファ》（2007年）や《ショートカット》（2003年）などの作品と、私的な要素が色濃く反映される《The Incidental Self》などの作品とに大別される。今回のプロジェクトは前者に属し、多くのひとが行き来するランドマークプラザの巨大な吹き抜け空間にプールと飛び込み台が出現する。作品は既存の建築空間と自然に溶け合うよう調整されたデザイン性を保ちつつ、物が本来あるはずのないところにあることから生じる違和感が物語を生み出す。身近なショッピングモールに持ち込まれたこの詩的なドラマは、観る者に細やかで鋭い感性の震えをもたらすだろう。横浜トリエンナーレ2008では、8月1日よりランドマークプラザにて先行発表の予定。

設置場所：ランドマークプラザ  
会期：2008年8月1日-10月26日（予定）

※こちらの画像の使用については広報担当までお問い合わせください。

## Didier Fiúza Faustino

ディディエ・フィウツァ・ファスティーノ

1968年フランス生まれ。現在、リスボンおよびパリに在住。



photo: Marc Damage  
H BOX ポンピドゥ・センター（パリ）での展示風景

ディディエ・フィウツァ・ファスティーノは、建築家として活躍する傍ら、パフォーマンス、インスタレーション、映像作品など、美術家としても活動を展開している。03年、ヴェネチア・ビエンナーレの他、04年モントリオール・ビエンナーレ、06年サンパウロ・ビエンナーレ、07年イスタンブール・ビエンナーレ等、数多くの国際展に参加。また、パリの国立近代美術館、ポルトガルのセラルヴェス現代美術館、オルレ안의FRACセンターでも展示、所蔵されている。横浜トリエンナーレ2008では、会期中特別展示されるH BOX（※）の設計、また新たな作品を展示の予定。

### ※ H BOX（エイチ・ボックス）

重厚なアルミニウムの旅行鞆を思わせる装いのH BOXは、世界各地の美術館や文化施設を巡回する移動式の映像上映室。ビデオ・アートは、本来、どこでも撮影可能なビデオカメラを使い、スクリーンさえあれば上映できることから、「移動するアート作品」とも呼ばれてきた。H BOXは、機能的で堅牢な馬具を作ってきたエルメスが、ビデオ・アート作品のために理想的な上映環境も含めた道具箱を作ったものといえる。6.5m×5mという大きさの移動式建築ユニットのなかにスクリーンを設置し、8人のアーティストの作品を上映予定。

キュレーター：ベンジャミン・ウエイル(Benjamin Weil)

建築：ディディエ・フィウツァ・ファスティーノ(Didier Fiúza Faustino)

参加アーティスト：アリス・アンダーソン(Alice Anderson)、ヤエル・バルタナ(Yael Bartana)、

セバスティアン・ディアス・モラレス(Sebastián Díaz Morales)、ドラ・ガルシア(Dora García)、ユディット・クルタグ(Judit Kurtág)、

ヴァレリー・ムレジャン(Valérie Mréjen)、シャリヤー・ナシャット(Shahryar Nashat)、スーメイ・ツェ(Su-Mei Tse) 計8名

H BOX 建築仕様：アルミニウム製 幅6.5m 奥行5m 高さ2.8m 総重量 2600kg 最高収容人数10名

企画・制作：エルメス

## Jorge Macchi and Edgardo Rudnitzky

### ホルヘ・マキ と エドガルド・ルドニツキー

ホルヘ・マキ 1963年 ブエノスアイレス生まれ。現在、ブエノスアイレスに在住。  
エドガルド・ルドニツキー 1956年 ブエノスアイレス生まれ。現在、ベルリンに在住。



トワイライト/ Twilight, 2006, Installation and Performance  
Argentinian representation at Firstsite, Colchester, England

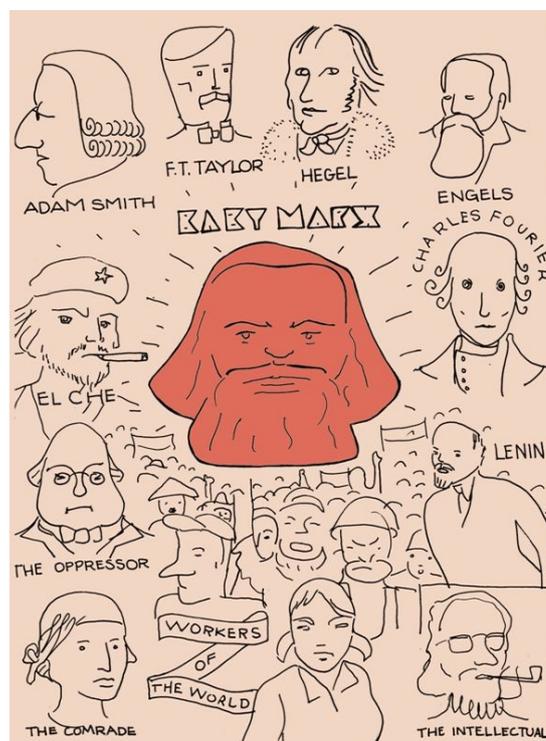
### 《トワイライト / Twilight》

ともにブエノスアイレス生まれのマキとルドニツキーは、活動拠点が異なるものの、1999年以来、コラボレーション作品を制作してきている。儚い瞬間を記録することで作品を構成するマキの作品には、詩的でメランコリックな雰囲気漂う。作曲家、サウンド・アーティストであるルドニツキーは、ダンス・パフォーマンス、舞台セットといった分野においても活動を展開している。彼は、マキ以外のアーティストとも数多くのコラボレーションを行なっている。横浜トリエンナーレ2008では、三溪園内の古い建造物にふたりのコラボレーション作品《トワイライト》の新バージョンを展示する予定である。斜めに高低をつけて張られた一本のワイヤー。ルドニツキーが作曲した基本的なメロディをベースに胡弓奏者が即興で奏でるなか、そのワイヤーをつたって灯りをともした一個の電球が、20分かけてゆっくり下降してくる。この作品は、アーティストのコラボレーションのみならず、古建築と現代アートが融和する試みといえよう。

## Pedro Reyes

### ペドロ・レイエス

1972年 メキシコ・シティ生まれ。現在、メキシコ・シティに在住。



Drawing for "Baby Marx" 2008

### 《Baby Marx》

レイエスは、建築家として教育を受け、社会空間におけるモダニズム観念・環境問題・地域社会の相互関係に注目している。理想主義的思想を抱き、制作や生活の根底には、世界を向上させたいという願いが含まれる。本展では《ベイビー・マルクス》を出品。マルクスをはじめレーニン、チェ・ゲバラなどのかわいらしいパペット人形によって紡ぎ出されるこの物語は、世界30カ国以上で愛され続ける新生児からの知育商品「ベイビー・アインシュタイン」に着想のヒントを得ている。この商品では、音楽で「ベイビー・モーツァルト」、アートで「ベイビー・ヴァン・ゴッホ」といったテーマが取り上げられているが、レイエスは、子どもや楽しいパペットに社会主義的イデオロギーを組み合わせることで、予想外な寓意を生み出すことを試みる。

## Teshigawara Saburo

### 勅使川原 三郎

1953年 東京生まれ。現在、東京に在住。



Fragments of Time 2008 photo: Bengt Wanselius

#### 《フラグメンツ・オブ・タイム / Fragments of Time》

勅使川原はダンスカンパニー KARAS を率いて、既存のダンスや舞踊の枠組み・スタイルにとらわれない、独自の創作表現を行う。ダンス、振付けはもちろんのこと、舞台美術、照明デザイン、衣装、音楽構成をも手がけている。横浜トリエンナーレ 2008では、光・音・空気・身体を自在に扱うことによって、空間を質的に変容させ、場を総合的に創出する新作、《フラグメンツ・オブ・タイム》を日本郵船海岸通倉庫で公開する。この作品は、5月にバーミンガムで発表され、今回の公演が日本においての初公開となる。白色の壁に囲まれた部屋の床に敷き詰められたガラス片の上のダンサー。ガラス片はダンサーの僅かな動きによって、その形状が変化し移動する。光をあてられたガラス片の無数の反射は、永遠に変化し続ける。砕かれたガラスの反射は時間のかげらなのか。ダンサーの身体はそのゆらめく反射と一体化し、新たな時空へ私たちをいざなう。

◇ 通常は、ガラスと光の展示。ダンサーによるパフォーマンスは週末などに予定。

設置場所：日本郵船海岸通倉庫

《この資料のお問い合わせ》

横浜トリエンナーレ事務局 広報担当 平、大西  
Email : [press@yokohamatriennale.jp](mailto:press@yokohamatriennale.jp)  
TEL : 03-5369-6065 FAX : 03-5369-6039  
〒160-0004東京都新宿区四谷4-4-1国際交流基金内

[www.yokohamatriennale.jp](http://www.yokohamatriennale.jp)